日本語教授研究所編

ラジオによる日本語の普及

財團法人 日語文化協會
日本語教授研究所

東京外国語大学
図書館蔵書
673696
平成 23 年度

はしがき

本書は日本語の世界進出に最新有用な一手段としてのラジオ放送による日本語教授の方法を研究した結果の發表である。

日本語の進出はあらゆる方法手段を講じて、有効適切にその實現を圖らなければならないが、中にもラジオ放送は最新るものの一つである。今本書に說く所は、今日のラジオ語學放送の情勢に卽した考究に過ぎないのであつて、その方法內容、特に放送技術については、今後一層の實際的研究を積む必要がある。本書が斯る研究の先驅となつて、その發達に資することが出來れば幸甚である。

本書の研究資料は、本研究所研究員中丸平一郎氏によつて蒐集され研究員會に於て研究檢討し、研究主任石黑魯平氏によつて取纏められたものである。尙、本書は單に理論のみでなく放送の實際に觸れる所が多いが、その方の資料は、東京放送局から北米向の日本語講座に於て本協會主事松宮一也氏が實際に使用した材料を、參考實例としてそのまゝ掲載したものである。

昭和十七年四月

財團法人 日語文化協會
日本語教授研究所

凡例

一、本研究所は、日本語の普及に關する各般の問題についての研究の成果、及び各方面の權威ある研究・論說等を隨時發表致します。

一、本研究所での研究の特色は、主として次に掲げた要目につき、專ら實地方面に重點を置き、體驗的意見を發表し、又具體的提案を試みようとするところにあります。

（イ）日本語普及に關する諸問題

（ロ）日本語教授法・教材教師養成等に關する諸問題

（ハ）日本語に關する諸般の研究調査

一、本研究所の研究報告は、日本語教育關係者並にこれらの問題に關心を有する諸賢の參考に資し、以て日本語普及の先驅となり、聊かその世界進出に貢獻せんことを念願するものであります。

財團法人 日語文化協會
日本語教授研究所

目次

緒言……一
一、國際放送の特殊性……四
二、語學放送の限界……一二
三、放送の實際……二五
四、日本語講座の教案實例　其一……三八
實例一　第一回放送……四〇
實例二　第四回放送……四八
實例三　歌の稽古……五七

五、テキストの作成並に頒布……六四
六、日本語講座の教案實例　其二……六六
實例四　お正月の話……六六
實例五　旅　行……六七

ラジオによる日本語の普及

緒言

近代戰における最後の勝利は、國家の持つあらゆる機能を十二分に働かせて、始めて確保せられるものである。吾々は現在この嚴然たる事實を、しみじみと深く味はされてゐる最中である。今吾々は、現代世界の複雜極まる情勢に應じて、國家の持つあらゆる機能を働かせる爲に、多岐多端な問題が賢明な處置と解決とを待つてゐること、そしてその賢明な處置と解決とが、國家の强く正しく生存する必須條件であることを、切實に悟らされてゐる。さういふ重要問題の一つであるラジオ、それを吾々は今、新しい機能に鑑みて、研究して見たいのである。

エーテルの波に乘るラジオは、火星の世界にも衝撃を與へてゐるかも知れないが、少くともこの地球の世界を股にかけて、その影響、その宣傳力の偉大なこと、正に現代に於ける最も恐るべき武器の一つであらう。躍進ドイツが、如何にそのラジオの新しい機能と威力とを重視して、研究と組織とに細心の努力を用ゐてゐるか、そし

て如何にその效力の發揮によつて赫々たる戰果を收めてゐるか。敗戰國の當局が、そのラジオを利用して民心の動搖を防がうと、如何に苦心慘澹してゐるか。ラジオの威力を思はしめる事實は、昨今盲唖といへども之を知り過ぎるほどよく知つてゐる。

戰爭とラジオ、殊にその國際的機能は、敵國の神經を攪亂し、思想を左右する爲に、あらゆる知能を動員して黑を白に印象するまでに、むしろ惡用濫用されてゐる場合すらある。そしてその方法の巧妙、効果の猛烈なことは、三十年前の歐洲大戰にはまだ見られなかつた、人類戰爭史の一大新現象である。だが吾々は今戰爭とラジオでなく、平和とラジオ、大東亞戰爭といふ『東亞永遠ノ平和』建設の聖業とラジオを研究したいのである。畏くもすめらみいつの『照りまし』のところ、忠勇義烈皇軍の武威壓するところ、皇化に浴せしめ國力に信賴せしめる文化戰の極めて重要なる一翼としてのラジオ、このラジオによつて日本語を普及せしめる爲に、吾々は如何なる方策を持つべきか、それを研究したいのである。

『國旗商業に從ふか、商業國旗に從ふか』の問答は、帝國主義的植民地擴張と資本主義的自由貿易とを信條とした西歐舊秩序に必然のものであつた。大東亞共榮圈の確立に於ては『國力言語に從ひ、言語國力に從ふ』といふこの確信の下に、言語に奉公の職域を黍うする吾々は、日本語の世界進出の爲に肝膽を碎くものである。ラジオによる日本語の普及は、吾々に課せられた新しい一つの問題である。併し之は新しくして又古い問題である。吾吾は、既にその實行に入つて多少の經驗を積んだ。今やこの問題が本格的に切實さ重要さを思はしめるにあたつて、吾々はこの經驗に基づき理論を究めて、以てこの國家的重大課題の處理と解決とに一分の貢獻を期する次第である。

ラジオによる日本語の普及！之は一面甚だ花やかな問題であるが、又一面甚だむづかしい問題である。徒らに多きを求めても失望するであらうが、又因循姑息、なすべきものを躊躇してゐては悔いを千載にのこすであらう。吾々はこの研究に於て、日本語普及の爲にラジオの機能を如何に用ゐるべきか、あらゆる側面と最高の程度とを考へると共に、その國際放送であり語學放送であるが爲に、必然的につきあたる限度を明確に見さだめることを忘れないやうに、十分心を用ゐるつもりである。

一　國際放送の特殊性

川中島・嚴島・山崎、戰國騷亂の間なほこの義戰があり、この三大義戰に襟を正す日本は、今や世界史的一大義戰を東半球の水面一帶に戰つてゐる。この義戰を敢てする日本の眞骨張が、東條總理大臣によつて聲明せられたその翌日、世界は人間界に義戰の存在すること、戰爭にかかる理念の含まれてゐることを、初めて悟つて仰天した。そして東亞の全民は救世主の出現として感激した。吾々は之を見て、之ほどの實を持つ日本が、今まであまりにその實を世界に示さなすぎたと思ふ。又、東條聲明がかくも早く世界に傳へられる文明の有難さを思ふ。それと同時に、日本語が世界各地に浸み込んで、肉聲のまま吾々の實が全地の民に傳へられたならば、更に更に感銘深く受け取られるであらうと思ふ。さう思ふにつけてもラジオの將來に期待するところいよいよ大きく、いよいよ急であることを思ふ。ラジオの國際性を促進することは、日本の世界史的使命の加はると共に、いよいよその切實さを加へて來る。

吾々のラジオを國際的に活躍せしめる爲には、さて、如何なる用意が必要であらうか。第一に考へなければならないことは、

(一)　國力が基底である

といふ、あまりにわかり切つてゐる爲に、却つて見おとされる恐れのある條件である。かねて相當長い間行はれたJOAKの『カレントトピクス』が、英語民族の世界的勢力の象徴であつたが如く、又近頃ドイツ語放送の次第に濃厚になつてゐるのが、ドイツのわが國に持つ關係が深まつた證據である如く、日本語の放送が他民族の間に聽かれるには、日本の綜合的國力がそこに有形無形に痛痒としてひびいてゐることが基底になる。國力の影響は日本語に耳を傾けさせ、日本語に耳を傾けることは日本への親しみを養ひ、言語と國力との兩者が循環して日本の世界史的使命遂行の歩を進めるのである。

日本語が他民族に親しまれる道は多岐である。放送はその一つの道である。だが、放送が他の道とかけはなれてゐては、その機能の十全を期することが出來ないばかりでなく、それは日本語の他民族への浸透にも不利である。吾々は、日本語の國際放送が、日本語教育振興國策の中に、有機的な位置を占めさせられるやうに、と切望するものである。放送が他の道と如何なる關聯を持つやうにすべきかは、追て次第に論述しようと思ふ。

國力が基底であるといふ命題は、日本が國力の培養を忘らない、といふことを前提としてゐる。日清戰爭の時、南米の小國チリーから日進・春日の二艦を買ひ入れて、甲鐵艦の自信を得た日本が、『眠れる獅子』が實は病める獅子であることを世界に知らしめ、更に十年の後『世界の恐れしロシヤの兵』に幻滅を感ぜしめ、今や『二敵國』標準の大軍備を擁して、世界の覇者を以て任ずる大國二つを、氣息掩々たらしめてゐる事實は、誠に『奇蹟的』發展として世界の刮目するところである。

併し、日本はまだまだ不完全極まる國である。前途多忙の國であり、前途多望の青年民族である。なすべきことを成し終へた、只老衰の年を數へる國ではないのである。『よりよきものを渴仰』して、一刻の慢心をも戒めなければならぬ。世界史的使命を全うする爲の實力と品格、その培養は日暮れて途遠き思ひあらしめる大仕事で、吾々の精進勉勵は正に之からが骨である。吾々は既に成れるものとしてでなく、常に成りつつある力として、エルゴンでなくエネルゲイアとして、世界に接し世界に語るのでなければならぬ。然らずんば直ちに種切れになつてしまふ。國際放送に種が無くなつて何のラジオ機能ぞや。

(二) 他國と自由競爭の立場にある

ことが、次に十分考慮すべき國際放送の特性である。エーテルに領海はない。電波の往來は自由無礙である。部分的の妨害や制御は、只理論的可能であつて實際には無力である。然も聽取者に對する拘束力は、一國内に於て官憲の行使する場合といへども、つゐに徹底を期することが出來ない。況んや國際放送に於てをや。自由競爭の否認によつて經濟學原論が立てなほされようとしてゐる今日でも、ここ國際放送に於ては、電波の自由競爭を何とも致し方がない。

自由競爭を免れないとすれば、凡そ國際放送を企てる以上、あらゆる點に於てわが放送の優秀を計つて、この競爭に勝たなければならぬ。如何なる注意を要するか。常に他國の國際放送に細心の顧慮を拂つて、他國の放送の上を行く優秀性をねらふ。放送内容に於て國際性に富み、新鮮味と魅力の豐かなことなど、絶對に必要である。

それと共に、聽取者獲得に關する施設工夫を凝らす必要がある。之については更に後に具體的に述べるつもりである。國際性の點については、今次大戰に於てドイツの國際放送が英佛のそれに打ち勝つたのなど、他山の石であらう。英佛は自國語だけに依る放送に過大の自信を持つてゐたのに、ドイツでは用意周到な外國語放送を敢行した。之はドイツが自國の意圖を他國に理解させる上に、顯著な効果を收め得たこと勿論であるが、吾々は之について大に反省させられる。

今吾々は日本語の他民族への普及浸透に極めて熱心であるが、その爲に外國語の利用を怠りがちであつてはならない。ラジオによる日本語の普及が今吾々の主題であるが、吾々はこの主題に忠實なるのあまり、段階としての外國語放送を邪魔ものにするならば、それは決して本來の大目的を達成する所以ではない。吾々はこの漸進的精神を重要とするが、顧みると今、外國語學習を輕視し若くは蛇蝎視する傾向が見える。之は恐るべき自負慢心であり、日本の大を成す所以ではない。吾々は大國民にならなければならないと盛んに聞かされるが、氣宇の悠大、計畫の遠大、漸進の大度、さういふものを忘れて抑々何の大國民ぞや。日本語のわからない者に何の日本語放送ぞや。

(三) 聽取者は自由選擇權を持つてゐる

のであるから、こちらの放送だけ聽かせようとしたつてさうは行かない。この點亦大に考慮を要する。各國からの放送の中で、特にわが國の放送を聽かうとするやうに導くには、何といつてもわが國の價値が他の國のよりも

高く評價されてゐることを基礎條件とする。日本が何を考へてゐるか、日本が何をしてゐるか、それを知らなければ不覺を取る、不利に陷ると感ずるならば、日本の放送をいやでも聽くことになる。國力の發展に伴つて、他國の官憲を動かしてその民にわが放送を强制的に聽かせることも、或る程度まで出來るであらう。けれども之は初めから勘定に入れない方がよい。自發的にわが放送を重視するやうになることを眼目として、ひたすら實力と品格とを培養することが最も堅實な方針である。

この基礎條件を確立して、その上で放送内容の優越を期する、聽取者の便益を計る。之が他國民の自由選擇權をむびやかさないで、自由競爭に勝つ正道である。抽象的にいへばこれだけであり、事は甚だ簡單のやうであるが、實際はそんなに簡單には行かない。放送内容の優越といふことが、なかなか複雜な要素から成るものであることは、極めて見易いところである。吾々はこの點に關して、特に原則となるべきものを斯う考へてゐる。即ち、聽かせると思はないで、聽いてもらふと思ふ態度が肝要である。この態度が定まれば、内容の考へ方が聽取者獲得の目的にかなふ方に向つて行く。恐くいへば迎合をも辭しない方に向ふのである。報道指導の實利的内容はむしろ從として、娯樂演藝等の興味的要素を重視するやうな、材料選擇法を取る。之は迎合であるが、決して唾棄すべき迎合ではない。この清濁併せ呑む度量、目的の爲に手段を許す雅懐、之が無くては自由競爭に委せられた放送に勝利は得られない。

大義名分を貴ぶ日本は、目的の爲には手段を選ばないマキアベリズムの侵入を許さない。世界には變通自在、

無節操の譏りも意に介しない、幾億の人間が住んでゐるのである。從つてこのやうな世界に呼びかける日本は、持ち前の高潔な大義名分觀の爲に、徒らに潔癖、短氣に陷り、小節に拘泥して意固地になつては、つゐにその大使命を全うすることが出來なくなる。日本は誠にここに一大缺點を持つてゐる。正道への手段としての權道を許す雅量がなくて、然も目的へとあせる。その爲に、しばしば、善意ならば憚るところはないと獨りぎめをして、强制的手段に訴へることがある。之は又別の方角を取つた權道である。然もそれが所期の目的とは反對に、逆効果をもたらしてゐる例が少なくない。國憲國法が絶對威力を以て嚴乎として支配する國内は、善意の强制極めて結構である。併し國際的には之は賢明な權道ではない。大陸に於ける年來の經驗は、明かにかかる權道の不利を教へてゐる。國際放送の考慮に於て、聽いてもらふといふ態度で、興味を主にし實利を副にする權道の如きは、何ら恥づべきものではなく、むしろ尊重すべきものである。この點は、かくまで言を費す必要がなささうに見えるかも知れないが、吾々の見るところでは、從來の獨善主義を徹底的に反省することが焦眉の急務である。

聽取者の便利を計ること、之もなかなか簡單ではないが、聽いてもらふ爲には十分研究をしなければならぬ。相手國の起居の時間によつて、放送時間を定めるなど、眞先に考へるべき問題である。各國時差の問題、相手國の年中行事・日常生活習慣、各國の海外放送時間など、當然綿密な研究調査を必要とする。ともかく聽取者は自由選擇權を持つてゐる。わが放送を聽きたく思ひ、聽き易く感じさせる爲には、國内放送の處理だけからわり出した知慧では不十分である。

（四）番組・時間を相手國の社會に知らしめる方法

が、次に實行問題として早速起つて來る、國內放送に於ては、東京の例を取れば、只二種類並行で、その番組・時間は毎日の新聞を通して一般に知らせて、統一も徹底も極めて容易である。海外放送に於ては、之が甚だ困難である。然も之を確實にしなければ、何を放送しても荒野に叫ぶと同じである。殊に外國語で放送されるものに對して、聽き入らうとするのは前以て番組の知れてゐる時に限るのである。ドイツとの國際放送が開かれて、ヒトラーを、ゲツベルスをと、吾々が夜のおそい時間にも拘らず、セツトの前に座るのは、前以てそれを知らされてゐるからこそである。番組・時間の知らされてゐない放送ほど、愚劣なものはないといつてよい。

然らば番組、時間を如何にして前以て知らしめるべきか。新聞紙・雜誌、殊に日刊新聞紙に掲載することの必要であり、最も有効であることは言ふまでもない。併し外國の經營であり遠隔の土地の刊行物であるから、只それに掲載する必要と効果とを感じただけでは何にもならない。その爲の協定を結び、或はその紙面を買收しなければならぬ。讀者の多い新聞・雜誌を買收するとか、日本經營の新聞・雜誌を發行するとか、英斷と投資とを敢行すること、多々益々辨ずるわけである。

支那について考へて見ると、體裁上あまり大きくない新聞・雜誌でなかなか大きな讀者圈を持つたものがある。こんなのにわたりを附けることは、比較的容易であり然も意外に有効であらう。音曲・演劇は支那人の特に愛好するところであるから、興味本位の放送については殊に、新聞・雜誌にわたりがつけ易いかと思ふ。又劇場への

廣告宣傳は、支那に於ては別して有効のやうである。その外、茶館とか、人の出入の多い所の利用も考へに入れるべきであらう。之らについては尙後に改めて言ふつもりであるが、要するに、聽取者の日常生活・社會慣習・趣味嗜好などを刻銘に調査して、岩淸水の寸隙にも浸み込むやうな方法を講ずべきである。

以上は國際放送の特殊性に鑑みて、根本の心構へともいふべき事柄を述べたのであるが、さて之を實際問題として考へると、當然そこに幾つかの制限が加はつて來る。吾々は今日本語普及の方法の一つとして國際放送を考へてゐる。之は既に大きな制限である。更に日本語普及はその段階として日本語學習の途を講じなければならないのであつて、國際放送によつて日本語が海外に響きわたる爲の準備が、又國際放送によつて行はれなければならぬ。吾々は今や國際放送の全機能の考察から、それが語學放送として利用される場合の狹い問題にはいらうと思ふ。放送による語學は當然大きな制限を受ける。先づそれを調べて見よう。

二　語學放送の限界

語學は耳・口・目・手の四つの器官の綜合活動によつてその實績を保證されるが、耳と口とが第一義であり、就中耳なくしては口があつても口を言語器官たらしめ得ない。耳こそ語學に絶對不可缺の器官である。耳を持たない幾多不幸な聾疾者が、口話教育によつて言語を習得する恩恵に浴してはゐるが、その教育の効果を身に占めた最高の人ヘレン＝ケラーといへども、正常の言語生活に完全に惠まれてはゐない。誠に耳は語學の生命である。だがそれは、耳さへあれば語學は完成する、といふ論理を成り立たせるものではない。

ラジオの實用價値が證明せられ、その利用が燎原の火の如く普及して、外國語學放送が試みられた時、日本全國の中等學校は英語の授業時間を一律にして、中央の大先生の語學放送で英語の授業を受けることにしたら、などといふ話があつた。併しそれを具體化しようとは誰も考へなかつた。それは英語教師の失業問題が邪魔したのではない、各學校の事情がそれを許さなかつたのでもない、それは實に、耳さへ働かせれば語學は完成する、といふやうな謬想が識者をだまさなかつた爲である。言語の當體は耳に訴へられる音である。併し言語が社會の機能となるには、音が幾多の補助物に包まれなければならぬのである。

更に、凡そ物を學ぶには、彫刻師になるにも師匠の爲に飯を焚き子守りをしなければならないやうに、當の主

題だけ學ぶといふものではない。學問教育は人間と人間の裸相撲である。語學といへどもこの原則に洩れるものではない。全人的接觸なしには完成するものではない。興湧いてはいよいよ深きを求め、疑生じては晰に落ちるまで質す生徒に、生活の有機的部分としての知を、情意の衣に包んで、或は鋭く或は温かに、緩急自然の理法に從つて教へる。應病與藥、人を見て法を說く佛祖の心、之が教育である。之が語學教授である。

かく考へて來ると、放送による語學、殊に海外放送による語學が、如何に微力なものであるか、想像に難くはない。微力だから捨ててしまふのならばともかく、吾々の持つあらゆる機能を動員して、吾々の大使命遂行に一分の貢獻をしようとする以上は、須く何が語學國際放送のハンディキャップであるかを精しく調べて、少しでもその不利を救ふ途を講ずべきである。以下、吾々の見る語學放送の限界を述べ、施すべき手段の考へ得られる限りをあげて見ようと思ふ。

限界一。**放送語學は音聲のみに依存する。**

チエスタトンは、字の讀めない者と足の自由でない者にしか、ラジオは有難いものではないといふ。タウトは人心を輕匆にするものとして、ラジオを咒ふ口吻をもらしてゐる。又或る人は、他人の密談や喧嘩を隣りの部屋で立ち聞きをするやうな、さもしい氣持が起るではないかと言ふ。吾々はラジオに對して皮肉な批評や道德的評價を試みる必要はないが、立ち聞きをしてゐるやうな、又盲人が芝居を見てゐる時に起すであらうと思はれる、如何にも物足りないやうな感じは、如何に慎んでも之を禁ずるわけに行かない。それは何故かといふと、ラジオ

は只音聲しか傳へてくれないからである。

言語の視點からラジオを批評すると、そこでは言語の表現性が少なくとも半分は殺されてゐる。放送技術の眞劍な研究は、凡そ音聲音響に託し得るあらゆる條件を、十分に具現するところまで行つてゐるが、顏面表情・全身擬態の如き目に訴へる表現性の機構、手ざはりや味や臭ひ、又全體の綜合であるところの雰圍氣などを感知させる表現性の機構は、今のところ全く絶望とされてゐる。やがてテレビジョンが實用化せられたらば、目の方の缺點は多分に除かれるであらうが、それによつて表現性がどれだけ高められるか、あまり多くを期待することは出來ないであらう。

放送には斯くの如きハンディキャップが附けられてゐる。之を語學の立場から見れば、更に多くの不利が附きまとつてゐる。今ラジオが音聲だけであることから、直接語學教授に及ぼす不利を列擧して見ると、

(一) 直觀教授が封ぜられてゐる。

言語殊に外國語の教授は、言語記號の音相と事物の表象とを直接に結び附けるやうにして、音・義・物、卽ちコトバ・ココロ・コトの渾一を期し、以て眞の意味を印象することを根本原則とする。この原則に忠實であるが爲には、實物・繪畫・標本・表情・動作などを目に訴へることは勿論、手ざはり・味・臭ひ等をそれぞれ指・舌・鼻に訴へることを必要とする。いはゆる直觀（直感）教授が企てられなければならぬ。テレビジョンが使はれるやうになつたらば、放送でも目の方の直感が大いに容易になるから、直觀教授が大部分安心して行はれることに

なるであらう。併し今日では直觀教授は全面的に封ぜられてゐる。從つて語學放送には、外國語教授の陷り易い説明に終始し、理解に終るといふ、かの説明主義、理解主義にとどまつてしまふ恐れが十分にある。

日本語を海外に普及させるのに、文化語としてか實務語としてかの論爭が今行はれてゐる。吾々は先づ實務語として普及させるのが正しい順序であると信ずる。文化語として、日本文化、日本で濾過した世界文化を、日本語のテキストで解明し宣布する段階に達したならば、説明主義、理解主義元より結構である。併しさういふ仕事はもはや純粹の日本語學ではない。それは日本語學の或る程度の力を基礎として、日本語學を更に高め深めながら、卽ち日本語學を副産物に期待して、日本學を課するものである。吾々はこの仕事を大いに尊重するが故に、早くその仕事の出來るだけの基礎日本語學を固めたいのである。この基礎日本語學、純粹な日本語學、之は説明主義・理解主義では決して成功しない。然も之を脱翼し之に替はるべき直觀教授が困難であるとすると、實行問題として一體どうしたらよいか。そこに吾々の苦心を要する問題がある。

(二) 飜譯教授を避けることが出來ない。

直觀教授が眞の意味教授となる所以は、外國語を事物表象に直接渾溶させるからである。それは外國語と事物表象との間に母國語を介入させないことを前提にしてゐる。外國語教授が直接法を最も良しとし、飜譯法を良からずとすることは、もはや議論のないところであつて、實績をあげてゐる教授者が既に實行してゐるところである。母國語を使つて飜譯的に扱ふことを避けようとすれば、途は直觀法しかない。然るに前項に言ふやうに、放

送語學では直觀法は全面的に封ぜられてゐる。さうすると、不完全とは百も承知しながら、飜譯法に訴へるより外に途がない。之は放送語學の運命である。

吾々はこの運命を諦觀して、その許す範圍に於て飜譯法が語學教授として持つ缺陷を、出來る限り輕減する工夫を凝らすより仕方がない。故に先づその何故に不利であるかを十分に明かにしなければならぬ。心理の內面を考察して、いはゆる直接法がその理論通りに外國語と事物表象との直接渾溶を何處まで確保してゐるか、大いに疑はしいといふ切實な反省をしてゐる人もある。事物を目に見せながら外國語を聞かせるといふ從來の直觀法の手法では、この疑ひは尤もなことである。吾々は、この氣休めに過ぎない手法の直觀法を脫却して、絕對に母國語の侵入しない保證つきの直觀法を教室に於て實行してゐるものである。だがそれは放送に於ては實行不可能であるから、問題は母國語介入を前提として論ぜられなければならぬ。

氣休め的直觀の効果を疑ふ眞面目な人は、結局、母國語が介入してもよろしい、あとで外國語そのものの反復を出來るだけ多くして、教授の中心をむしろ反復に置けば、直接法所期の目的に到達することが出來ると、大悟し安心境を得てゐる。之は吾々が飜譯法必至の放送語學に於て、そのまま傳用すべき信念である。

飜譯法の持つ原理的缺點は、外國語そのものに耳・口を、そして意識を、働かせる時間が母國語のそれに驚倉されるといふところにある。(外國語・事物表象の二段の代りに、外國語・母國語・事物表象の三段になるといふ原理的缺點が缺點中の第一位を占めること勿論であるが、ここにはそれを除外して考へる。)そこで飜譯法を用ゐ

るにあたつて、この母國語の蠶食量を出來るだけ少くすることが、この方法の不利を救ふ唯一の道である。母國語に使ふ時間を出來るだけ少なくして、それだけ外國語に時間を多く使ふ。その時間は何に向けられるか。それは外國語そのものを聽かせること、外國語そのものを口に唱へさせること、この二つに向けられるのである。

右の如き(一)(二)の二大制肘に對して種々な工夫が必要であるが、先づ第一に考へられるのは、聽取者用のテキストの助けをあてにすることである。そこには直觀を助ける繪を豐富に入れて、英・佛・獨語などの爲の自習書に見るやうに、一物毎に、又部分毎に番號を附けておくなど、誰も氣の附く用意である。かういふ助けによつて、出來るだけ、飜譯法を縮少し、餘力を外國語の音に向けさせるやうに勉める。只このテキストの配布が決して容易でないことを思はなければならぬ。その方法は後に改めて述べるつもりであるが、ともかく十分に行きわたらないことを豫想しなければならぬ。幸にテキストを持ち得た者に於ても、直觀はつゐに擬似的であり、母國語の節約もさう大した程度に行はれるものではない。從つて教室に於ける語學教授に比べて、放送語學はそれだけでは心細いものであり、從つて時間を澤山かけなければならないものであると、覺悟をしなければならぬ。

かく放送語學の効果をひかへ目に考へなければならないのは、今一つ原因がある。それは、

限界第二。**聽取者の習得方法や成績如何に何らの保證がない。**

といふ、ラジオの本質から來る理由である。直接法を實行しても、その眞價を保證するものは反復練習である。況んや飜譯法による場合に於てをや。然も放送語學は飜譯法に是れ依るとすれば、放送なるが故にいよいよ反復練

習が致命的重要さを持つ。然るに放送では、聽取者が果してロを働かせてゐるかどうか、正しく模倣し反復してゐるかどうか、さつぱりわからない。テレビジョンが十分利用される時まで、この點は全く絶望である。之は語學として實に、魂のぬけたものと言つても過言ではないが、如何とも致し方がない。

更に之を教育の理念、教授の技術から見るならば、放送語學の効果は益々はかないものになる。學習者の程度如何、印象効果如何、之らは全くわからない。更に、質疑應答によつて知識を確實にすること、缺陷を發見して匡救の途を講ずること、之ら一切を總括する全人的教育力を發揮すること、之らは放送に於ては全く縁なき世界である。放送は、要するに來たる者は拒まず去る者は追はず、聽きたい者は聽け、覺える者は覺えよ、といふ甚だのんきなもの、道德的批判ではない意味での、無責任極まるものである。それだけ放送者としては頼りない仕事である。

このラジオとして運命的な缺陷を救ふ道はつゐに無いであらうか。かすかながら道がないことはない。それは聽取者側に指導者を持つやうにすることである。後に段々述べるつもりであるが、學校その他の團體と連絡を取つて、適當な指導者を依頼し、その指導者によつて反復練習を行ふやうに世話をやいてもらひ、正しく模倣することの出來ない者に特に矯正の手を延ばしてもらふなどは、全然望みのないことではないであらう。

限界第三。**聽取者は去就の自由を完全に持つてゐる。**

之は國際放送の特殊性として既に述べたところであつて、語學放送の當然課せられてゐる制約である。この制

約が日本語學放送に有利に傾くに至るのは、日本に對する關心の增大を何より根本的な動力とするであらう。この根本が出來てゐるならば、語學放送は他の放送よりも無理なしに、聽取者をこちらに引きつけることが出來るであらう。それは學校・會社その他の團體の、日本語の必要を感じてゐる指導者たちが、生徒や部下に海外放送による知識增進を助ける途を講ずるには吝かな場合はあり得ても、日本語學を奬勵することには力を入れるであらうからである。さういふ方面の情勢を十分に探査して、若しさういふ日本語奬勵家があつたら、ぬかりなく連絡を取つて、半强制的にでも日本語學放送を聽かせるやうに、骨を折つてもらふだけの熱意がなければならぬ。

併しさういふことをあてにする前に、日本語學放送の優秀性に心を碎くべきである。對象の知識や趣味の大小高低を研究して、放送內容の性質や程度を賢明に切りもりすることは、第一に必要であらう。その細目については更に後に述べるつもりであるが、ともかく聽取者は取捨、去就の自由を完全に保有してゐること、諸外國が放送界を自由競爭場としてゐることを、あくまで念頭から去らせないで、研究計畫に勵精する覺悟が絶對に必要である。

限界四。**對象が多種多樣で、誰にも訴へる力がなくなる恐れがある。**

日本語の普及を計るべき地域は段々に擴張され、民族の數もそれにつれて增大される。各民族はそれぞれの事情を持つてゐるから、語學放送の內容について違つた要求を持つかも知れない。更に一民族內でも社會がわかれてゐて、各社會がそれぞれの要求を持つてゐることは確かである。かういふ風に細かに別れた要求に對して、悉

く滿足を與へるやうに一時に多種多樣な放送を行ふことは、到底實行の出來るものではない。賣藥ならば萬人向きに調製することによつて多くの需要者を獲得することが出來ようけれども、放送では萬人向きの調合をしたら何人をも滿足させ得ないで、聽取者なしといふ結果になるであらう。之は容易ならぬ問題である。どう之を解決するか。

はつきりとした對象を定めて、それに適確に合ふ內容を盛る。かういふねらひ撃ちを、順々に對象を變へて行ふ。之より外に方法はない。ところで的確に合ふ內容を作るのは、なまやさしいことではない。歷史・地理・社會等、百般の科學を適用して對象の研究を十分に積まなければならぬ。支那を考へて見ると、支那學全般にわたつて考慮しなければならぬ。日本のやうに統一した有難い國に生を享ける吾々は、支那四百餘州が如何に多彩であるかを明かに悟るのに甚だうとい。放送の立場から對象の對立を、ほんの一端だけうかがつて見ても、(一)一般大衆と知識階級、(二)北方人と南方人、(三)國內人と華僑、(四)資本家(政治家・官吏・商人・軍人等をも含めて)と勞働者、(五)歐米派と日本派、(六)小兒と成人、(七)男と女、などは、はつきりちがつてゐる。だが之は極めて大ざつぱな分け方であつて、實際は、例へば(二)の南方人と北方人との對立の如き、もつとこまかに分れてゐるのである。

かういふ風に分れてそれぞれ特殊性を持つてゐる對象に對して、その特殊性の精密な研究に基づく放送內容を作るのであるから、仕事は頗るむづかしいのである。(一)を例に取つて見れば、知識の極めて低級な、然も數

に於て壓倒的な一般大衆に對しては、教化が重要なねらひどころであると共に、極めて低い生活の保證が考慮されなければならぬ。之に反して知識階級に對しては、彼らの自負する支那文化の機微に觸れること、彼らの近年心碎して止まない歐米的教養に觸れることなど、是非洩らしてはならないであらう。之は廣く支那向け放送の內容について(一)の對象に卽してその一端を述べたのであるが、語學放送に於てもこんな風な對象による加減が大いに必要である。

限界五。**教材配布の徹底が頗る困難である。**

教室に於ける語學教授は『耳と口と目と心だけお持ち下さい、外に何も入りません』と言ひ切り得るほど、殊に初めの內は教授用のテキスト風のものが入らない。然るに放送語學に於ては、テキストなしでは殆ど何も出來ない。放送語學では教材配布が致命的に肝要であるが、その配布が又意地わるく甚だ困難である。如何に困難でも教材配布は必ず徹底させなければならぬ。賢明な計畫の下に、勞力と費用とを吝まない覺悟が必要である。今次大戰の結果、日本が利用し得べき放送機關も段々に多くなり、それに附隨する便宜も次第に吾々の利用を待つてゐる。之らを十分組織立てて、さういふ機關によつて教材配布の徹底を計るべきことは言ふまでもない。併し何と言つても地域が廣いのであるから、十分整理のついた地域から、集中主義によつて、狹い所に徹底させ、それから段々廣く配布の手を擴げるといふのが、順序であり有効であらう。

限界六。**一時限がかなり短くされる。**

以上（一）から（五）までは主として聽取者の側から見た制約であるが、放送者の側から見ると又一つ制約がある。對象を眼前に持たず、マイクロフォンを睨んでゐる放送者は、教室に於ける授業のやうに、息を休んだり氣分を轉換する餘地がない、徹頭徹尾しやべり通しである。かういふ事情にあるから放送者は、教室授業のやうな時間の長さを働くことが出來ない。たとへ疲勞をこらへるとしても、それは早速放送効果に影響する。だから自然語學放送は短時間を一時限にすることになる。從來の經驗によると、大體三十分が限度である。一回を短くする代りに、回數を多くする。之が一番効果的である。從つて短期日の間に所定の分量を片づけるやうな計畫は、効果の低下を覺悟してでなければ立てるべきでない。

三　放送の實際

國際放送としての放送語學が、如何なる特性を持ち、如何なる制約を受けてゐるかを、吾々は縷々と述べて來たが、かく限定せられた國際語學放送は、その實施にあたつて又それ獨特の考慮を要すること言ふまでもない。以下吾々の調べ得たところを段々に述べて見ようと思ふ。

第一、聽取者の獲得について。

巖頭にうそぶく虎といへども一片天心の月を對象としてゐるのが、構圖の自然であるといふ。吾々の國際語學放送が聽取者のあてなしに、單なる物理學實驗であつては、それはあまりに高價な道樂である。對象として考へられる社會の事情を精察して、そこに適する方法を講じ、國際情勢の推移を機敏に捉へて、それに應ずる方策を取る。この二大眼目の下に各種の用意を怠らないやうにして、一人でも多く聽取者を獲得することに勉めなければならぬ。以下その用意の觀點を個條がきにして見る。

（一）　放送時間の一定

語學放送は娯樂放送とは違つて、氣分や都合で聽いたり聽かなかつたりの扱ひをすることを、放送者も聽取者

も豫期してゐない。語學放送は幾回かにわたる一コースを、必ず休まず勤勉に聽くべきものとして計畫されるものである。さういふ連續聽講を可能ならしめるには、第一に毎回の時間のあて所が一定してゐる必要がある。時間を一定しておけば、之によつて熱心な聽取者は自分の時間割を作ることが出來る。さういふ時間の持つて行き所は、その條件として、聽取者が時間割を作るのに最も都合のよい所でなければならぬ。之は人によつて朝がよいとか午休みがよいとか夕方がよいとか、色々にわかれるわけであるが、併し前節に調べたやうに、對象を限定しての語學放送であるから、さう區々になることはなからう。

さういふ都合のよい時間を求めるには、聽取者の生活狀態をよく調べることが必要である。又それと合せて、他の放送種目の配合を研究し、又殊にそこに向けられる各國の海外放送の種目と時間とを十分顧慮する必要がある。段々やつてゐる内に、放送を通して聽取者に問ひを發し、それによつて時間の置き所を是正して行くことも有効な方法であらう。ともかく色々な方法によつて最も適當な時間を見定めて、それを毎回の固定した時間にして置くことは、聽取者を獲得する上に缺けてはならない條件である。

(二) 始業の合圖

授業を受けることを本業としてゐる生徒、そして懷中時計や腕時計の普及によつて猫も杓子も自分の時計を持つてゐる上級の生徒學生、さういふ者を集めた學校でさへも、鐘やラッパや太鼓やサイレンで始業の合圖をする。實は餘計のことのやうである。だから合圖をしない大學もある。だが放送で語學を勉強しようとする者は、時間

が一定してゐるから自分の時間割を作つてゐても、外の仕事に沒頭してゐてつゐ放送の時間に氣づかないことがあり得る。ここには始業の合圖が絶對不可缺である。そこで或る一定の樂器を使ふといふのが、誰が考へても一番穩かな方法であらう。一定の音樂を放送することが、恐らく一番よいであらう。日本語學を聯想させるやうなもの、日本を聯想させるやうなもの、乃至語學を聯想させるやうなもので、すぐれた旋律諸調を選ぶことが一番よいであらう。聽取者側の民族的音樂についても顧慮しなければならないであらうが、ともかくよく選ばれた音樂を一定して始業の合圖に使ふ必要がある。之は聽取者招集の實利的意義の外に、日本語學放送に對する親しみ、引いて日本への親しみを深める、情操的意義を持つものとして、十分考究の價値がある。

(三) 各種團體との連絡

『學校放送』といふ名稱が生まれてゐるほど、學校と放送との連絡がつき始めてゐる。『ラジオ體操』が一般人に任意に利用されてゐるのを、會社その他の團體が利用してゐることも夥しい。之らは國内放送の領域であるが、併し放送種目によつては、之は國際放送の關與を許す餘地のあることを示唆するものである。語學放送の如きは、之ら團體との連絡のつけ具合で、まとまつた聽取者を獲得し得る性質のものである。學校では外國語教授に蓄音器を利用する途が開けてゐるが、之は學校の都合のよい時間に隨意に使ひ得るので大いに便利である。放送となると、時間割を放送時間に合せなければならないし、語學放送の常として連續講義であることが又一つの不便であるが、特に熱心で好意のある學校を見つける努力は全然無用ではなからう。學校以外の諸團體についても同樣で

ある。かういふ連絡を成るべく多くの團體と附けて、まとまつた聽取者を獲得する計畫は是非練るべきである。かういふ連絡がつけば、聽方一方で直接指導練習の出來ない放送語學が、その缺陷を補ふ手がかりを得ることになつて、量と質と兩方の効果をあげることが出來る。かういふ妙機を味はふ爲には、無論日本の實力と品格とがその根本誘導力であるが、放送事業當局が之に着眼してその道を開拓する智慧と努力とを用ゐなければならぬ。

(四) 聽取奬勵の方法

射倖的動機を道德的見地から制止し、賭博的營業を風教的見地から禁止するのは、日本の取る健全な取締原則であるが、馬匹改良の國家的目的の爲には競馬といふ大きな射倖的賭博を公認する。十分愼重な組織の下に權道的手段を用ゐることは、更に高い大きな目的の爲には是認しなければならぬ。國際語學放送は何よりも先づ多くの聽取者を獲得しなければならないのであるから、その大目的の爲に多少射倖的な動機を利用する策略を用ゐることも許さなければならぬ。

策略といふと甚だ俗惡に聞えるが、たとへば日本語の書取を郵便はがきで集めて優良者に賞品を贈る、などといふ程度の策略であつて、俗は俗でも惡ではない。外地の或る半官半民の敎化雜誌が、片カナによる日本語のクロッスワーヅを載せて、輕少な賞品を懸けたところが、次の月には新入會員が相當にあつた。之を一年續けた結果、會員の增加、然も自發的申込みが、創刊十幾年來未だかつて見ない盛況を呈した。雜誌の性質上女が多かつたが、漢人系統の人が大部分であつたことは、吾々に何ものかを暗示しないであらうか。

かういふ懸賞は、經營上手な雜誌社が殆ど常識的手段としてゐるところで、日本語學放送が之に眞似るがよいといふだけのことである。クロッスワーヅや書取の外、考へ物や謎々の如き、又放送で聽いた日本語の中から、或る音聲の含まれる語を拾ふとか、或る品詞を指定したのを拔き出すとか、凡そ日本語に親しみを深め注意を向けさせる目的にかなつた問題を出す。賞品は別に大した金のかかつたものである必要はない。貰つた者が悅び・誇り・自信・向學心・親日感を植ゑ附けられるやうな、象徵的價値に着眼することが大切であらう。

(五) 根氣

日本語學國際放送などといふ事業は、やつとその概念が出來ただけである。初めは聽取者が幾人あるか、よほどの先覺者かよくよくの物ずきかが最初の聽取者であらう。この事業は殆ど無から有を生み出さうとするやうな、難事中の難事である。先覺者理解者との好い連絡をつけて、團體的の聽取者を得るやうな方法を始めとして、任意の聽取者を獲得する爲のあらゆる手段を講じて、半歩遲々たるを恐れない絕大な根氣がなければならぬ。一年や二年で一喜一憂するやうな短氣では到底成功しない。石の上にも三年といふ。不撓不屈の忍耐で、日本語學放送ありといふ印象を拔くべからざるまでに打ち込まなければならぬ。

この根氣は放送實行者に必要なだけではない、否、放送事業協會に必要なだけではない。實に國策の最高機關に於て十分保證されてゐなければならぬ。監督官廳はとかく成績の早く目に見えることを求めて、五年十年と長い目で見る餘裕を缺いて困る。吾々は國際日本語學放送を、實に、國家總機能發揮によつて帝國の世界史的大使

命を達成する爲の一翼として、研究し立言してゐるのである。願はくは吾々の職域奉公・臣道實踐の赤誠をして、ごまめの齒ぎしりに終らしめないやうに、特にこの根氣の一點について進言を許されたい。

（六）　廣告宣傳

日本語學放送の行はれてゐること、それが如何なる使命を持ち如何なる價値を持つか、それを聽くと手取り早く云々の利益があること、などをなるべく廣く知らしめることは、聽取者獲得の爲に絶對に必要である。その方法としては、既に概略言つたやうに、第一に日刊新聞に宣傳の機會を求めることである。ラジオ欄を特約して必ず公告することは勿論、日語放送の意義や利益を折にふれ、緣をたどつて、巧妙に吹聽する智慧を絞る必要がある。テキストをも掲載させ得るならば益々よろしい。既存の新聞を賣收してしまひ、或はわり込みの餘地があつたら、新たに新聞を發行すれば、思ふ存分宣傳廣告の腕が揮へるといふもので、計畫としては之をも敢て行ふまでに勇敢に遠大でありたいものである。

雜誌と特約して宣傳記事を載せ、テキストを載せ、或は豫定表やテキストを挾み込む道も考へてよい。演劇や映畫や音樂會のプログラムの端に廣告を出すとか、病院・劇場・さかり場等にビラを貼るとか、そこの告知板に餘地を求めるとか、或は回覽板式なものを出すとか、キャラメルの箱や包み紙、辻占の紙切れの如きものに、日本語學を奬勵し、日語放送聽取を奬勵するスローガンを刷り込むとか、利用し得るあらゆる隙を求めるべきである。自由經濟の爛熟は廣告價値の過信を思はしめるほどであるだけに、かういふ宣傳廣告にかけては擲多天才的

な人物もあるのであるから、さうい人物を語學放送の擴張部に使ふならば、更にもつとよい智慧が得られるであらう。

（七）　集中主義

物によつては淡く廣く行く方がよいが、今から始めようとする語學放送の如きは、狹く濃く行く方が賢明であらう。日本内地から放送する場合は、結局淡く廣くといふことになつてしまふわけであるが、東亞共榮圈確立の事業の進捗に伴つて、各地で放送する場合を考へると、狹く濃く行くか淡く廣く行くかが問題になつて來る。吾吾の見るところでは、最もよく秩序の回復し、最もよく事情の整つた地域を對象に取つて、先づそこで日本語一般放送と歩調を合せて日本語學放送を始め、之を今後の模型にするつもりで、あらゆる實驗を行ひあらゆる經驗を積むことを計るがよいと思ふ。即ち先づ集中主義によつて今後の綿密な準備を整へるべきだと思ふ。

之は聽取者獲得の爲だけの問題ではないが、この事業の成績を決める最大要件たる聽取者獲得の點から見て、この集中主義が一番有効であると思ふ。この準備がよく出來たらば、廣い範圍に之を適用することは容易であり、効果が大きいと見てよい。試みては改めて行くことは、何によらず覺悟してかからなければならないが、見す見す損をするやうな、準備不足の大規模を初めから試みるのは愚かなことである。

（八）　修得者の特典

東亞の各地に於て日本語の自由に使へる者は勿論、辛うじて日本語で或る限られた用を辨じ得る者でも、職場

を求めるのに大小さまざまの便利があり、職場に於て大小さまざまの恩惠を受けてゐる。この狀勢は今後益々進展するであらう。そして之は自然の勢に乘ずることが肝要ではあるが、それと共に日本の國策として、當該地域の當路と十分な連絡諒解を保つて積極的に促進强化する必要がある。諸種の日本語教育機關に於て一定の學力認定を得たものに對して、就職上の優先權を與へ、待遇上の好條件を認める、などの原則を立てることが望ましい。かういふ原則が立つて、その實現が着々形に見えるやうになれば、日本語學熱は高まること請合ひである。

この形勢が馴致せられるならば、(而してこの形勢はどうしても馴致しなければならない、)日本語學放送の聽取者が增すことは自然の勢である。放送は勝手にやる仕事でなく、國家の統制の下に行ふのであるから、日本語學修得者に與へる特典原則の適用を受けることは當然である。この間の關係を十分に附けて、各程度毎に聽講完了者に試驗を受ける途を設けて、適當な段階の資格免狀を與へ、之が就職や待遇の方に有効に使へるやうに仕組む。吾々の考へるところの概略を述べると、大體こんなものであるが、かういふ精神で研究すれば、尙幾多の智慧が出るであらう。

第二、放送語學教授の技術と內容

前節に述べるやうな聽取者獲得方法を進めると同時に、放送して全然無默でないだけの見込みが立つたら、早速放送を開始しなければならぬ。いよいよ放送となれば、技術の十分すぐれてゐること、內容の十分精進せられ

てゐることが、必須の條件である。この條件を滿たすためには、凡そ次のやうな點が大切であらう。

(一) 聽取者の母國語を主體とすること。

放送外國語教授は、既に言つた通り、說明主義によつて理解を計るといふ方法を取るより仕方がない。それは卽ち聽取者の母國語を主體として、そこに外國語を織り込むより仕方がないといふことである。之は初步者に對しては特にやむを得ないことであるが、中等程度、高等程度に進むに從て、母國語が段々少くてすむことになるとはいへ、やはり純粹に外國語だけでといふわけには行かないであらう。外國語教授としては之は變則であるけれども、放送である限り之は止むを得ない。放送語學としては之が正則だといふ、特殊な考へ方を定めるべきであらう。從つてこの爲に決定的につきまとふ缺陷を補ふ道を講ずることが、放送語學教授の技術として特に必要となつて來る。故に次にその點を列擧して見たい。

(二) 外國語そのものを印象する爲に、あらゆる工夫をすること。

說明主義・理解主義・飜譯主義を正則と認めなければならない放送語學ではあるが、最後のねらひどころは、教室語學と同樣、外國語の耳と口との訓練にある。故に母國語に織り込まれる、もつと正當な言ひ方をすれば、母國語で綴り合せられる、外國語そのものの正しい鮮かな印象を與へることに、凡ての仕事の回轉軸があるのでなければならぬ。それをもつと具體的にいへば、放送語學の生命である、

(イ) 耳を練ること。

に少しでも有利な道を取らなければならぬ。その爲には、先づ（外國語そのものを）

（ロ）明瞭に話すこと。

（ハ）ゆつくり話すこと。

が是非必要である。併しこの爲に、自然正常な日本語の言ひ方をこはすやうになつてはならない。かういふ注意を拂ひながら、

（ニ）根氣よく反復すること。

が、又特に肝要である。音だけを頼りの放送である上に、機械の制約があるのであるから、馬鹿らしくなるほど反復する必要がある。音の種類によつては例へば力行音の如きは、騒音が勝つてしまふやうな傾きがあつて、聽きあやまる恐れがあるが、又一向その心配のないのもある。連音としての語句に於ても、さういふ差がある。だが聽きあやまる恐れの有る無しは問題ではない。聽きおとさない爲にとか、聽きあやまつたままにならない爲にとかいふ、消極的な理由だけで反復の必要を考へないがよい。正しい音を明瞭に印象する爲にといふ、積極的な意義を思つて反復するがよい。聽き方は度數が多すぎることのあり得ないものだと悟るべきである。

（三）初めから實際的への途をつけること。

本教材としては、どうしても單語をポツリポツリ出すより仕方がない。けれどもそれだけでは足りない。本教材のやうに圓滿に覺えさせることを期待しないでもよいが、生きた日本語——生活表現の日本語——に親しませ

ることが、初めから考慮されなくてはならぬ。それは開始とわかれの挨拶、教授運轉上の命令希望の文章などを、段々に使ふがよいといふのである。吾々は早く實用會話を教へなければならないとは思はないが、それへの基礎として、實際放送教授といふ生活の一端に自然に結びついた言語を、初めから聽かせることは是非必要である。

（四）一回毎に獨立したものとして扱ふこと。

語學放送は、その本來の目的から、幾回かに亘つて連續しなければ纏まらない。從つて初回から終回までの一回一回は、纏まるべき全體の有機的組成員をなしてゐること勿論であるが、放送の實際としては一回毎に一切りになることが是非必要である。テキストのあちこちを參照するやうに、放送中に前後との連絡を指示すること、又特に前回の材料について復習することは、無論怠つてはならないが、參考書を調べるのと同じやうに前後の參照が出來、教室の語學のやうに前回の復習が出來ると、豫想してはならない。一回で纏まるやうに仕組んだ材料の終りの方を、どうせ次回があるのだからと思つて、次にまはすやうなことは極力避ける必要がある。從つて一回の材料は張りすぎないやうにしておいて、若し時間の餘裕があると知れたら、反復練習を增すやうな臨機の處置を取るやうにしたい。

第三　內容の種別と取扱ひ。

放送內容は之を、興味本位・實用本位・基礎教授といふ三種くらゐに分けて考へたい。以下之を一つ一つにつ

いて、廣い意味の語學の立場から、對象と材料との點を明かにしようと思ふ。

一、興味本位のもの。

【對象】(一) 兒童及び一般民衆、(二) 知識階級

【材料】

(一) 歌謡音樂

イ、歌　謡

ロ、日本的の若しくは日本で有名なもの

(二) 演　劇

イ、平易な對話劇

ロ、兒　童　劇

ハ、歌劇・音樂劇

(三) 時事解説

イ、聽取者の言語を土臺にしたもの

ロ、簡易平明な日本語によるもの

(四) 懸賞募集に關するもの

イ、問題の提出

ロ、回答の發表

(五) 錄音による日本紹介

イ、(一)(二)の材料によるもの

ロ、風土上の自然音

ハ、諸地方行事の實況

ニ、近代文化施設の響

ホ、輕妙な講演・演説の一部

【方　法】

(一) 立體化・劇化

右にあげた材料を適當に按排し、殊に音樂や擬音の効果を巧みに利用して、放送を立體的に構成する。そして日本的な雰圍氣を劇的に演出し、日本的雰圍氣の快適を感じさせるやうに苦心する。

(二) 日本語の適度な導入

講演・演説は勿論、劇の如きは、日本語が主要な部分になるが、その他の材料、殊にそれが立體化され劇化される場合には、日本語が從の位置に立つことは止むを得ない。併しこの日本語は量は少くても、快適を期する全

體の情調に助けられるもので、一音千金といふ價値がある。十分吟味する必要がある。

(三) 諸方面の智慧の動員

吾々の考へる材料やその綜合は、大體右のやうに註文がやかましいのであるから、その材料仕上げには勿論、實際放送にもしばしば、音樂家、俳優、話し家、學者、教育家などの參加を求めなければならぬ。各種樂團・劇團（殊に兒童の）の出演は殊に多く依賴しなければならぬ。土地の兒童が參加するなどは、大いに意味がある。蓄音器レコードの利用は申すまでもない。映畫との連絡も亦重要であらう。

二、實用本位のもの

【對象】一般民衆

【材料】（一）日常會話（二）事物・消息の解說

【方法】實際的であり、民衆の日常生活に直接必要な會話、事物知識、時事消息などが材料であるが、之も興味本位のものに準じた仕組みで與へるやうにしたい。卽ち、買ひ物、朝夕の往來、などの對話とか、家庭、街頭集會などの情景を、立體化し劇化するやうにしたい。

三、基礎的教授

【對象】（一）成人、（二）兒童

【方法】初步のことであるから、興味本位のものの方法を加味して乾燥無味を避ける必要がある。又、

兒童の學校教科書や日本語教授諸施設の教科書などに、不卽不離の關係を保つことは恐らく有効であらう。

基礎課程は、入門期（聽方）、話方、讀方（機械的の意味での）の三段くらゐにとどめて、綴方や文法はこの段階には入れにくいし、又一方、日本語の空氣が一層濃厚にその社會に出來るまでは、教授を始めてもあまり効がないであらう。極めて初步の教案を、參考の爲に次に載せておく。尙この間に唱歌をはさむのは經驗上有効と思ふので、その教案をも序に添へておく。

四　日本語講座の教案實例（其一）

この實施狀況を一通り前以て說明する。之は、財團法人日語文化協會日本語教授研究所長松宮彌平氏指導の下に、昭和十五年十月から翌年三月まで、東京放送局から北米へ向けて放送された初步日本語講座の教案內容である。放送時間は、毎週日曜日午後二時（彼地では前日土曜日午後九時頃）から三十分間であつた。

放送用語は北米向けであるから、英語であつたが、最初には英語の發音の正確を期するため、英語の部分は米國人に話させ、日本語の正確な發音を日本人教師が言つて聽かせるといふ方法で、事前に兩者が十分に豫行演習を行つて實際放送に臨んだ。

前段にも述べてある通り、ラジオ放送に於ては音聲のみに依存するより外に方法がないことから、教授の實際に於て最も必要である聽取者の反應を得ることが出來ないので、放送を實際に行つて見ると、教室に於ける教授に慣れてゐる者には、放送者の獨り芝居に陷る感が强く、恐しく手持無沙汰で不安が多い。この點については、聽取者側の狀態を十分に考慮に入れて、相手は見えなくても、又相手の言ふことが聞えなくても、出來るだけ相手を働かせ、聲の仲介によつて放送者と聽取者とが一體になるやうに努めた。これについては、教授者が言葉を反復して聞かせ、說明を與へた後に「それではどうぞ、（私の言つた通り）言つて下さい」といふ風に指導して、

聽取者が自分で言つてみる時間を取つてから、次に進むやうに行つてみた。又生徒を放送室に連れて來て教室に於けると同樣な作業を實施し、生徒に言はせる時に、聽取者もこれに和して言はせるやうな方法も採つて見た。

語學放送に於ては直觀教授法が封ぜられてゐて、飜譯教授を避けることが出來ないのであるが、出來るだけ日本語を多く聽かせ、日本語だけで教授を運んで行けるやうにするために、教室用語は最初から成るべく多く與へた。例へば「皆さん、今日は」「左樣なら」「それでは、どうぞ、言つて下さい」「もう一度」「解りましたでせう」の樣な言葉は、早くから教へて置くと、實際教授上便利であり、又效果的でもある。

又聽取者の興味を持續させるためには、放送者が聽取者の母國語を適宜に使つて、注意を惹き付けることも留意しなければならない。言葉の說明の中に、その言葉に關聯した事柄を面白く付け加へるとか、聽取者の母國語や習慣などと比較するとかなどの方法も考へられる。更に講座の中に、十分位の時間を取つて、日本語の歌の稽古や、日本の事情などを聽取者の母國語で話して行く中に、日本語を聽かせて習はせるとかの方法、更に實際の實況を擬音や錄音などを十分に利用した劇化教授を行ふことも甚だ効果的である。

最後に、放送の實際を經驗して痛感することは、日本語放送の技術を體得した放送者の養成である。教室に於ける教授術に熟達した者が必ずしもよい放送者であるとは限らない。放送の持つ特質と必然的な各種の制限をよく心得て、聽取者を惹き付けることが必要である。このためには、日本語放送に幾度も經驗を重ね、その場合に當つて、適宜に處置出來る種の放送度胸とでもいふものを持つことが肝要である。卽ち放送局としてもこのやう

な專門的技術者の養成に心懸けなければならない。

實例一　第一回放送

（次は日本語講座の第一回放送で時間は三十分、前半は、この講座の性質や學習法を説明し、最初の授業として單語を、約二十語教へてゐる。文中引用符内にある言葉は醇正な日本語を以てし、以外は聽取者の母國語によつて、説明的に進めて行く。尙（譯）は、教へる日本語を生徒の母國語に飜譯する場合を示してゐる。）

（教師）皆さん、今日は――皆さん、今日は。

これは日本語の挨拶です。この言葉は「皆さん」と「今日は」とで成立つてゐますが、「皆さん」は二人以上、大勢の人々に對して呼びかける時に使ふ言葉であります。あなた方の國の言葉で言ふと（譯）に當ります。次の「今日は」は（譯）のことですから「皆さん、今日は」といふのはあなた方の國の言葉に直譯すると（譯）となるのであります。私は今この實用日本語講座を始めるに當つて、聽取者諸君に對して「皆さん」と呼びかけて、「今日は」と挨拶を申上げた譯であります。若しこれが個人と個人との相對であつたならば「皆さん」と呼びかける必要はありませんから、只「今日は」だけでよろしいのであります。

それではこの日本語の挨拶の言葉を言つて見ませう。今私が繰返して言ひますから、よく聽いて下さい。

（教師）今日は――今日は――こん・にち・は――今日は。

今度は私に續いて言つて御覽なさい。

（教師）今日は（生徒）今日は。（教師）今日は。（生徒）今日は。

（教師）皆さん（生徒）皆さん。（教師）皆さん（生徒）皆さん。

（教師）皆さん、今日は（生徒）皆さん、今日は。（教師）皆さん、今日は（生徒）皆さん、今日は。

（教師）皆さん、今日は（生徒）皆さん、今日は。

どうです。上手に言へましたか。猶あとで度々繰り返して言つて御覽なさい。さうして早速途中などで知人に出會つた時にこの日本語で挨拶をしてみて御覽なさいなさい。

（教師）皆さん、今日は――皆さん、今日は。

偖、今日から實用日本語講座を始めるのでございますが、始めに一應申述べて置きたいことがございます。言葉を學ぶには、言葉の意味を覺えたり、又字が讀めたりするやうになる前に、言葉そのものを能く聽き覺えることが必要であります。それは言葉を音聲で聽取つて、それが口で言へるやうになることで、これが言葉を學ぶには一番大切な點であります。

この實用日本語講座は、そこに重點を置いて、たゞ日本語の意味を講義したり、説明をしたりするやうな方法を採らずに、日本語の音聲をそのまゝ聽取らせて、先づ日本語の本體本質を、掴ませるやうに致したいと思ひます。さうしてから後に、言葉の説明や講義もして、日本語についての知識を與へるやうに致したいと思ひます。

それですからこれから教へる日本語は先づ私が幾度も繰返して言ひます。聽取者は落着いてそれを聽取つてから、私の言つた通りに模倣して、自分で言つて見るのであります。

放送ですと、學校の教室などで、教師と生徒で向き合つてする稽古のやうな具合には行かないのでありますけれども、講師の言ふ言葉を耳に聽き取つて、そのまゝ模倣して自分の口によつて言つて見るといふ方法は、たゞ日本語の意味の説明を聽いて日本語を理解するといふよりも、聽取者に於ても頗る興味があり、意義があり、又日本語に直接の親しみを持つことになるであらうと思はれます。

それで日本語には五十程の音がありまして、その音が連り合つて語になり、又文にもなるのであります。さうしてそれ〴〵の意味も現はれてまゐります。

この實用日本語講座では、これらの音が連り合つて意味を持つ日本語の中、言ひ易いと思はれる言葉の練習から始めます。そして追々に複雜な言ひ方、使ひ方に進むことに致します。最初は二音、三音乃至四つの音位の結合した言葉を教へて、それを練習致します。そして、それが自由圓滑に言へるやうに丹念に練習してから先に進むやうに致します。（備考―音韻について最密に言ふ必要がないから、このあたり通俗的に言つてゐるのである。）

今その扱ひ方を詳しく申しますと、先づ私が教へる言葉を言つてそれを三回程反復して口述します。次にそれを一應單音に分けて、一音づつ發音して、その言葉が幾つの單音から成つてゐるかを明かにし、又結合した一語に纏めて口述します。此の間、聽取者は耳を澄まして能く聽取して下さい。それからその言葉を猶一、二回繰返して言ひますが、今度はちよつと間隔を置いて言ひますから、その間に聽取者は講師の發音を模倣してそのまゝ自分で發音して言つて見るのであります。聽いたまゝを自分の口で言つて見ると、その言葉が經驗されて自分のものとなるのであります。これでつまり言葉を覺えたことになるのであります。

この練習がすむとその言葉を飜譯して意味がわかるやうに致します。それが終ると最後にその言葉を二回程口述します。この際、聽取者も亦、私について言つて見るのであります。

これで、最初の日本語の言葉を聽き且言つて、言葉そのものを覺えたと共に、その言葉の意味も分り理解も出來た譯でありますから、次の新しい言葉の教授に移ります。そして次々に教へて行く言葉も、同じ方法順序で教へて行くのであります。

それから、今日習つた日本語は、次回の講座までよく復習、練習して、自由に言へるやうになつて居られることを希望致します。毎回の教材は、テキストにも掲げてありますが、聽取者が記號なり何なりで心覺えを記錄して置いて、復習されるのも更に結構であります。又これからの教材は、いつも前に習つた言葉に關聯して作られてゐるのでありますから、その點からも教つた言葉をよく復習記憶して置くことは忽せにしてはならないのであ

ります。

大體これらのことを承知していたゞいて、今日の稽古に入りませう。先づ今日は物の名稱などの單語から練習を初めませう。どうぞ能く聽いて下さい。

（教師）ハタ——ハタ——ハ・タ——ハタ——ハタ——ハタ——ハタ。

「ハタ」は「ハ」と「タ」と二音が結合して「ハタ」となつたもので、その意味は（譯）であります。

日本語の名詞には英語のAとか The のやうな冠詞が付きません。又名詞自體では數も性も示しません。

今一度繰返して言ひますから、私が言つた後で直ぐに私の言ふのに倣つて自分で言つて御覽なさい。

（教師）ハタ（生徒）ハタ。（教師）ハタ（生徒）ハタ。

（教師）次は、ハナ——ハナ——ハ・ナ——ハナ——ハナ——ハナ。

「ハナ」は（譯）であります。この「ハナ」の「ハ」は「ハタ」の「ハ」と同じ音で、それに「ナ」といふ別の音が結合したのであります。それでは皆さん、私について言つて下さい。

（教師）ハナ（生徒）ハナ。（教師）ハナ（生徒）ハナ。

以下「ヤマ」「ミチ」「イス」「ツクエ」の四語を同じ手續で教へる。

（教師）ホン——ホン——ホン——ホン——ホン——ホン——ホン。

この「ホン」は二つの音、即ち「ホ」と「ン」とから成り立つてゐますが、最後の「ン」はいつも他の音に連結して使はれて、一音で使はれることはありません。それですから、いつも他の語に連結したまゝ一語として發音するのであります。「ホン」は英語（譯）であります。それでは練習を致しませう。

（教師）ホン（生徒）ホン。（教師）ホン（生徒）ホン。

（教師）次は、エンピツ——エンピツ——エン・ピ・ツ——エン・ピツ——エンピツ——エンピツ。

この「エンピツ」は即ち「エ」「ン」「ピ」「ツ」から成立つてゐるのでありますが、「エン」は「ホン」と同じやうに離さないで發音し、「ツ」も「ピ」につけて「ピツ」と一語のやうに發音します。「ピツー」とならないやうに氣を付けて下さい。「エンピツ」は英語（譯）です。それでは練習を致しますから、私の言ふ通りに言つて下さい。

（教師）エンピツ（生徒）エンピツ。（教師）エンピツ（生徒）エンピツ。

以下、「カサ」「カバン」の二語を教へる。

（教師）次は、バウシ——バウシ——バウ・シ——バウシ——バウシ——バウシ。

「バウシ」の「バウ」は「ボ」の音を長く引いて「ボー」と二音節にするのであります。「バウシ」は（譯）であります。それでは練習に移りませう。よく聽いて下さい。

（教師）バウシ（生徒）バウシ。（教師）バウシ（生徒）バウシ。

（教師）次は、クツ——クツ——クツ——クツ——クツ。

この「クツ」の「ツ」は「エンピツ」の「ツ」と同じで、「クツー」とならないやうに發音して下さい。「クツ」は（譯）であります。それでは私について言つて下さい。

（教師）クツ——クツ——クツ。はい、どうぞ。（生徒）クツ。（教師）クツ（生徒）クツ。

次に「サジ」と「サラ」を教へる。

（教師）次は、チヤワン——チヤワン——チヤワン——チヤ・ワン——チヤワン——チヤワン——チヤワン。

この「チヤワン」の「チヤ」は「チ」と「ヤ」の二つの音ですが、「チ・ヤ」と發音しないで一語のやうに「チヤ」と發音します。「チヤワン」の「ワ・ン」の「ン」は「ホン」や「カバン」の「ン」と同樣に「ワ・ン」と離して發音しないで「ワ」に付けて「ワン」と發音します。「チヤワン」の「チヤ」は英語の（譯）、「ワン」は（譯）で、「チヤワン」は（譯）のことであります。それでは練習しませう。

（教師）チヤワン（生徒）チヤワン。（教師）チヤワン（生徒）チヤワン。

（教師）次は果物の名前を三つ教へます。

以下「モモ」「ブダウ」「リンゴ」を教へる。

（教師）次は獸の名前です。

以下「イヌ」と「ネコ」を教へる。

これで今日の稽古は終りですが、習つた日本語は二十でした。全部物の名前です。今一度繰返して申します。

（教師）ハタ——ハタ。ハナ——ハナ。ヤマ——ヤマ。ミチ——ミチ。イス——イス。ツクエ——ツクエ。ホン——ホン。エンピツ——エンピツ。カサ——カサ。カバン——カバン。バウシ——バウシ。クツ——クツ。サジ——サジ。チヤワン——チヤワン。サラ——サラ。モモ——モモ。ブダウ——ブダウ。リンゴ——リンゴ。イヌ——イヌ。ネコ——ネコ。

（教師）それでは私が一語づつ言ひますから、私に續いて言つて下さい。

（教師）ハタ——（譯）——ハタ、はい。（生徒）ハタ。

（教師）ハナ——（譯）——ハナ、はい。（生徒）ハナ。

以下、教へた單語を順次に復習する

それでは今日の稽古を終りますが、その前にもう一つ挨拶の言葉を教へます。それは別れる時に使ふ「さやう

なら」と言ふ言葉です。

（教師）さやうなら——さやうなら——さ・やう・なら——さ・やう・なら——さやうなら——さやうなら——さやうなら。

これをあなた方の國語で言ふと（譯）となります。「さやうなら」。二人以上澤山の人に向つて言ふ場合には、これに、今日最初に教へた「皆さん、今日は」の「皆さん」、即ち（譯）をつけて「皆さん、さやうなら」と申します。それでは次の放送まで「皆さん、さやうなら。皆さん、さやうなら。」

實例二　第四回放送

前三回の放送によつて單語から助詞の「ト」・「ノ」及び形容詞の使ひ方を教へたのであるが、第四回放送に至つて文の教授に入る。放送時間は三十分間である。

（教師）皆さん、今日は——（譯）——皆さん、今日は。

前々回と前回の放送で習つた句を一通り復習してから、今日の新しい稽古に入りませう。最初に私が日本語の句を言つて、次にそれを英語に譯し、もう一度繰返して申しましたら、皆さんが言つて下さい。

最初は「ト」を使つた句です。

（教師）ハタ　ト　ハナ——（譯）——（生徒）ハタ　ト　ハナ。（教師）ホン　ト　エンピツ——（譯）（生徒）——ホン　ト　エンピツ。

以下「茶碗ト皿」「桃トリンゴ」、「犬ト猫」を同樣手續で復習する。

次は「ノ」を使つた句です。

（教師）ハコ　ノ　フタ——（譯）——（生徒）ハコ　ノ　フタ。

（教師）クツ　ノ　ヒモ——（譯）——（生徒）クツ　ノ　ヒモ。

以下「部屋ノ入口」「入口ノ戸」を同樣な方法で復習する。

次は形容詞を使つた句です。

（教師）シロイ　イヌ——（譯）（生徒）——シロイ　イヌ。

（教師）クロイ　ネコ——（譯）（生徒）——クロイ　ネコ。

以下「赤イ花」「高イ山」「狹イ道」「長イ川」「白イ犬ト黑イ猫」「高イ山ト長イ川」ヲ同樣手續で復習する。

皆さん、皆お分りになりましたでせう。

それではこれから今日の稽古に移りませう。今日からはこれ迄の課程よりも一段進んで「文」の稽古に入りま

す。これ迄に習つてまゐりましたのは、單語と句で、言はば、文を構成する材料でありました。これからは、その單語や句を寄せ集めて、それを續けたり、結び合せたりして、纏つた意味の通ずるやうに組み立てた形にして稽古するのであります。即ち文を學ぶのであります。言葉としての形から言へば單語は二、三或は數個の音の連結であるから、一番短いのでございます。次に句は單語の結びつきであるから、稍長い形になりますが文になりますと、單語も句も含んだ長い連續形になるのであります。

私共は今迄三回の講座で、發音單語句の練習を致しました。さうして言葉の意味、言葉の列べ方、言葉の言ひ方の、それぞれの初歩を知ることが出來ました。けれども、それではまだ完全に思想を表現する形態を學んだといふ所にまでは達してゐないのであります。それが、今、文を稽古するに至つて、たとひ極簡單なものであつても一つの纏つた思想を言ひ表すことになるのであります。從つて稽古するに致しましても、前の單語や句は、連續した音もその數が少ないのでありますから、練習も比較的簡單で容易な點がありますけれども、文になりますとさう簡單といふ譯にまゐらないのであります。

それに、單語や句は、要するに文を構成する材料で、その稽古は文の要素の練習であつたと言へるのでありますが、文を學ぶとなると、これは、私共が日常使つてゐる話の形式を學ぶのでありますから、も早材料や要素でなく、日々お互に交換したり、敍述したりする談話そのものを稽古するのであります。即ち今日迄に學んだ、又これからも學ぶ單語や句を要素として構成された日本語の話の形式、その話方を學ぶのであります。言ひ換へて

見れば、文の稽古はも早日常の談話の稽古であつて、實際に話をしてゐる心構でかゝらねばなりません。さうして自由に日本語の談話を交換運用する道が開けて來るのであります。

文の稽古の仕方については、單語や句の稽古の仕方と同じであつて、先づよく聽き取つて模倣することに始まり度々繰返して練習し、その言ひ方に慣れることを主眼とするのであります。しかし文の敍述は單語、句の單調さとは違つて、敍述の調子、音の抑揚など細かい點に渉つて複雜になつて來ますから、たゞ言葉を並べて組み合せればよいのではなく、微細な點にまで注意をして稽古するやうに希望いたします。

ここでもう一度申して置きたいことは、この講座の始めに申しましたやうに、日本語を學ぶのにとかく意味を知ることばかりに傾いて考へられてはならないことであります。殊に文の稽古になりますと、文の意味を知ることに稽古の全體を傾倒し勝になります。けれども、此の際は意味の詮索などにこだはらないで、文の形態を聞き慣れ言ひ慣れ、言葉の使用上の感じを養成することに專念するやうに努めて戴きたいのであります。そして、現在習つてゐる、教へてゐる程度の日本語の學習では、意味を詮索したり研究したりしなければならないやうな分り難い言葉は一つもないのであります。つまり、目に見える事物や有樣に關聯した言葉を選んでありますから、自ら了解が出來て、意味を知る爲に苦勞することは更に無い筈なのであります。さうでありますから、耳にした言葉を口で表はす練習を重ねることが一番大切なのであることを記憶して戴きたいと思ひます。

私共は常に周圍にある色々な事物に接觸します。そしてそれ等に對して何等かの感じを持ち、又何とか思ふ思

ひが生ずるのであります。その感じ、その思ひが言葉となつて現はれて來るのでございます。例へば、机の上に或物の存在を見る。その存在の狀態をどういふ言葉で表現するか、それらの手近い事物を言ひ現はすには何といふのかその文から稽古を致しませう。よく聽いて下さい。

（教師）本があります——本があります——本・が・あります——本・が・あります——本があります——本があります。

「本」は（譯）です。前に練習した中にありましたから、お分りでせう。「あります」は物事の「存在する」といふ意味を現はす言葉であります。それで「本があります」は「本」の存在することを言ひ現はしたものでございます。即ち皆さんの國語で言へば（譯）と言ふことになります。本があります。次に、この「本があります」の中には、まだ教へない言葉が一つあります。それは「本があります」の「が」です。この「が」は前に出ました「ハダト ハナ」（譯）「イスト ツクエ」（譯）などの「ト」、又「ハコノ フタ」（譯）「クツノ ヒモ」（譯）の「ノ」と同じ種類の言葉で、文の主になる言葉について、その主語であることを示すのであります。故に「本があります」といふ文の主になる中心の言葉は「本」でありますから、それに「が」が付いて主語であることを示し、次の「あります」によつて、その「本」があるのかないのかを、言ひ表はしてゐるのであります。

お分りになりましたと思ひますから、一つ練習をして見ませう。そして今迄に習つた名詞によつて、同じ形の文の應用練習を致しますから、よく聽取つて、私の言ふのについて言つて下さい。

（教師）本があります——本があります——本が・あります——本があります。皆さん言つて下さい。本があります。（生徒）本があります。

（教師）次は、椅子があります——椅子・が・あります——椅子があります——椅子があります——椅子があります。

椅子は英語（譯）ですから、この文の意味は（譯）といふことになります。それでは練習しませう。

（教師）椅子があります——椅子があります——椅子があります。皆さん、どうぞ。椅子があります。（生徒）椅子があります。

以下同樣の手續で「帳面があります」「鉛筆があります」「箱があります」「蓋があります」「茶碗があります」「匙があります」を致へる。

以上は前に習つた物の名稱に「が」「あります」を結びつけて、その物の存在してゐる有樣を言ひ現したのであります。此の言ひ方が分れば森羅萬象、ありとあらゆる物の存在することを言ひ現はすことが出來るのであり

ますから、此處に應用引例した以外の物の名前を入れ替へて言つて御覽なさい。それもいゝ復習、又練習であります。

それから、今度は事物の存在を認めない場合、それを言ひ現はす言ひ方は何であるか、即ち「あります」の反對は何であるか、それは「あります」の語尾の「す」を「せん」に變へるのであります。即ち「ありません」といふのであります。一つ前の練習文を、この「ありません」に變へて練習して見ませう。よく聽いて下さい。

（教師）本がありません——ありません——ありません——ほん——（譯）——本がありません。

椅子がありません——椅子がありません——椅子——（譯）——椅子がありません。

以下「帳面」「鉛筆」「箱」「茶碗」「匙」を使つて應用文を練習する。

この「あります」「ありません」は私共の思想發表の兩面でありまして、一方を肯定、他を否定と申します。この二つの形式は談話する場合の大きな筋であつて、この筋を傳つて私共の思想は自由に活動するのであります。猶、前の練習文によつて「あります」と「ありません」を交互に練習致しませう。どうぞ私の言ふのについて言つて見て下さい。

（教師）本があります——（譯）——本があります。はい、どうぞ。（生徒）本があります。

（教師）本がありません——（譯）——本がありません。はいどうぞ。（生徒）本がありません。

（教師）次は、椅子——（譯）——椅子があります——椅子があります。はい、どうぞ。（生徒）椅子があります。

次は否定の「ありません」を使つて、

（教師）椅子がありません——椅子がありません。はい、どうぞ。（生徒）椅子がありません。

以下「帳面」「鉛筆」「箱」「茶碗」「匙」を使つて同樣手續による練習を行ふ。

皆お分りになり又よく言へましたでせう。それから、次は二個或は二個以上の物を一つの意識に於て、見てその存在を言ひ現す場合、及びその存在を認めないことを言ひ現す場合の言方は前に出た助詞の「ト」を名詞と名詞の間にはさんだ句、例へば「本と鉛筆」（譯）に肯定の場合は「あります」を付けて「本と鉛筆があります」（譯）とし、否定の場合は「ありません」を付けて「本と鉛筆がありません」と言ひます。又所屬の意味をもつ事物の存在、非存在の言ひ現はし方は、助詞の「（ノ）」で繋いだ句、例へば「靴の紐」（譯）に「あります」「ありません」を付けて、「靴の紐があります」又「靴の紐がありません」と致します。

それでは一つやつて見ませう。初めによく聽いて下さい。

（教師）本と鉛筆があります——本・と・鉛筆・があります——本があります——鉛筆

があります——本と鉛筆があります——本と鉛筆があります。

次は否定の形で、

(教師) 本と鉛筆がありません——本と鉛筆がありません——本と・鉛筆が・ありません——本と鉛筆が・ありません——本と鉛筆がありません——本と鉛筆がありません。

以下「柿と林檎」「靴の紐」「部屋の入口」につき肯定及び否定の文を聴かせる。聴かせ終る中に適當に譯語を加へて意味の把握を助ける。

それではこの助詞の「ト」を使つて二つの物の存在を表す言ひ方を練習しませう。

(教師) 本と鉛筆があります——本と鉛筆があります——本と鉛筆 (譯) ——本があります (譯) ——鉛筆があります (譯)。この二つの文を一緒にして一つの文にして、「本と鉛筆があります」それでは言つて下さい。

(教師) 本があります。はい、どうぞ。(生徒) 本があります。

(教師) 鉛筆があります。はい、どうぞ。(生徒) 鉛筆があります。

(教師) それでは一つの文にして、本と鉛筆があります——本と鉛筆があります。はい、どうぞ。(生徒) 本と鉛筆があります。

次は否定の形であります。よく聴いて下さい。

(教師) 本と帳面がありません——本と帳面がありません——本があります——(譯) ——帳面があります——(譯) ——本と帳面がありません。それでは言つて下さい。本がありません。はい、どうぞ。(生徒) 本がありません。

(教師) 帳面がありません。はい、どうぞ。(生徒) 帳面がありません。

(教師) 一文にして言ひませう。本と帳面がありません——本と帳面がありません。(生徒) 本と帳面がありません。

以下「柿と林檎」「靴の紐」「赤い花」「白い紙」「高い山」「長い川」等によつて練習する。助詞「ノ」及び形容詞を用ひた文に入る前にはその旨、言葉を添へる必要がある。

それではこれで今日の稽古を終ります。「皆さん、さやうなら——(譯) ——皆さん、さやうなら。」

(教師) 今度は皆さんが言つて下さい。「さやうなら——さやうなら」はい、どうぞ。(生徒) さやうなら。

(教師) さやうなら。

實例三　歌の稽古

次例は實用日本語講座を授けてゐる中、最初から第十回目頃の放送時間中の約十五分位を割いて試みた歌の稽

古の放送内容である。

語學教授に於て、歌を教材として使ふことの價値は既に認められてゐる所である。これは發音訓練に役立つのみならず、學習者の興味を起させる點からもその利用は十分に考へられなければならない。ラジオ放送によつて歌を練習する試は色々行はれてゐるが、子供に對する場合でも、教へる歌の言葉は既に知つてゐる場合が多い。しかし、日本語教授に歌を利用する場合には、學習者が既に習得した語句のみを以て作られた歌を教へるのが最も適當であるが、これは中々望み難い。そこで歌の選擇については、

(イ) 語句の音が出來るだけ簡單明瞭なもの。

(ロ) 歌の内容が理解し易いもの。

(ハ) 歌詞に繰返しの多いもの。

(ニ) 歌詞の音を出來るだけ害はないやうに作曲されたもの。

(ホ) 日本に於て誰でもが知つてゐるもの。

などに注意することが必要であると思ふ。もつとも、以上の中(ニ)については作曲の關係上、歌詞の音の有つ音位と歌曲の持つ音位とを同じにすることは、作曲上、不可能に近いことであらうが、これについては前以てかゝる差異のあることを斷つて置く必要がある。例へば、次の例に於て、「カア、カア、カラスガナイテイク」の「イク」の「ク」は曲に於ては三音節であり、次の「カラス、カラス、ドコヘイク」の「カラス」の「カ」は二

音節である等である。この點は、どこの國の歌にも同樣の現象があるのであるから、理解に困難ではない筈である。たゞ歌で教へられた言葉が「カーラス」となつてゐるから、話す時もその通りに「カーラス」であるやうに覺え込まれてはならないのであつて、歌詞を授ける時に、よく教へて置かなければならない。

それから實際の指導に當つては、歌詞の發音を十分に覺え込ませることに努力することが肝要である。このためには、幾度も歌つて聽かせること、又歌詞を普通の讀み口調で授けるとか又は歌の口調で聽かせるとかして、正しい發音を把握させなければならない。

次に掲げた例は、北米向實用日本語講座を東京から放送した時に行つたのであるが、歌詞の練習及説明は筆者が當り、歌の指導はダン道子女史が當られた。

(教師) 皆さん、今日は。今から日本語の稽古を始めます。

今日は歌の稽古から始めませう。歌を教へて下さるのはダン道子先生です。それでは先づ始めに先生に歌つて戴きませう。それでは先生どうぞ。

(歌) カア、カア、カラスガ啼イテ行ク

カラス、カラス、何處へ行ク

オ宮ノ森へ、オ寺ノ屋根へ

カア、カア、カラスガ啼イテ行ク

教師の歌二回

今ダン先生に歌つて戴いたのは「カラス」の歌です。「カラス」は（譯）であります。「カラス――カラス――カ・ラ・ス――カラ・ス――カラス。

（教師）第一段目は、

「カア、カア、カラスガ啼イテ行ク
「カア、カア、カラスガ啼イテ行ク

先生どうぞ、

（歌）カア、カア、カラスガ啼イテ行ク

（教師）「カア、カア、カラスガ啼イテ行ク」の「カア、カア」は烏の啼聲です。日本でも、米國でもその外どこの國でも犬のほえる聲やカラスの啼く聲は同じなのでありませうが、これを聞いて人間が聲に表しますと、何れも異つた音で表してゐます。例へば日本では犬のほえる聲は「ワン、ワン」と言ひ、猫の鳴く聲は「ニヤー、ニヤー」、その外、動物でなくても、時計は「カチ、カチ」と言ひます。これ等と同じやうに烏の啼聲を表すのには、「カア、カア」と申します。それですからこの歌の始めは、烏の啼聲で「カア、カア」です。

次は「カア、カア、カラスガ啼イテ行ク」の「啼イテ行ク」です。「啼イテ」は（譯）で、「行ク」は（譯）ですから、「啼イテ行ク」は（譯）となります。それですから、第一段目の「カア、カア、カラスガ啼イテ行ク」は（譯）となります。「カア、カア、カラスガ啼イテ行ク。」

ダン先生どうぞ。

（歌）カア、カア、カラスガ啼イテ行ク

次は、先生どうぞ。

（歌）カラス、カラス、ドコヘ行ク

第二段目の終りの「ドコヘ行ク」「ドコヘ行ク」は、「ドコヘ」と「行ク」とで出來てゐます。この「行ク」は前の「啼イテ行ク」の「行ク」と同じで（譯）で、「ドコヘ」は（譯）ですからこの段の「カラス、カラス、ドコヘ行ク」は（譯）となります。それでは先生どうぞ。

（歌）カラス、カラス、ドコヘ行ク

以上のやうな方法で、「オ宮ノ森ヘ、オ寺ノ屋根ヘ。カア、カア、カラスガ啼イテ行ク」を教へる。

これでこの歌の言葉を全部覺えたわけです。それでは私がもう一度言ひますからよく聽いて下さい。

カア、カア、カラスガ啼イテ行ク（譯）

カラス、カラス、ドコヘ行ク（譯）
オ宮ノ森ヘ、オ寺ノ屋根ヘ（譯）
カア、カア、カラスガ啼イテ行ク（譯）
歌の言葉と意味は解りましたでせう。それでは先生に始めからもう一度歌つて戴きませう。

教師の歌二回

もう歌へますか。それでは先生に一段づつ練習して戴きませう。初めに歌つて「ハイ」と仰言いましたら、一緒に歌つて下さい。

（歌）カア、カア、カラスガ啼イテ行ク。はい。（生徒）カア、カア、カラスガ啼イテ行ク

以下終りまで教へる。

今度は二段づつ一緒に歌ひませう。

（歌）カア、カア、カラスガ啼イテ行ク
カラス、カラス、何處ヘ行ク。はい。
（生徒）カア、カア、カラスガ啼イテ行ク
カラス、カラス、何處ヘ行ク

以下同樣に終りまで。

それでは始めからよく聽いて下さい。

教師の歌

それでは御一緒に。はい。

生徒と共に歌ふ。

もう一度。

生徒と共に歌ふ。

もうよく歌へるやうになつたでせう。ダン先生、有難うございました。又そのうちに外の歌を教へて戴きませう。

「カラス」の歌の練習はこれで終ります。

五　テキストの作成並に頒布

テキストの必要、その具へるべき條件などは、既に段々述べて來たので、いよいよその作成の問題を考へて見ようと思ふ。

作成　については、既に述べたやうな内容を持つことにして、進んで形式や體裁のことを考へて見たい。

一、形式は、つまり表現形式の問題で、

(一) 聽取者の母國語を土臺にして、それに日本語を織り込み、力の進むと共に日本語を濃厚にして行く。

(二) 母國語にしても日本語にしても、説明は平易、明快に十分力を入れる。

(三) 日本語は、語學階梯としての制約の許す限り、自然な活きた正しい使ひ方に十分意を用ゐる。

(四) 適切にして氣品のある圖表や繪畫を入れる。（聽取者の社會の傳統的な審美眼にかなひ、然も日本美を傳へるやうに、二つの標準に從ふことは非常に困難であらうが、之を十分顧慮する必要がある。）

二、體裁の問題であるが、

(一) 實用的事務的に考へないで、商品價値をねらふ。その爲には、

(二) 表紙の圖案、用紙・製本・活字など、聽取者社會の現代の趣味・感覺を考慮する。日本的であることを

失ひたくないが、衝突するやうな場合には、日本趣味を從の位置におくのも止むを得ない。

(三) 日本人が想像で決めた現地の趣味・感覺で體裁を決めることは慎む。從て聽取者社會の趣味・感覺の十分な研究をしなければならぬ。

之らの注意を拂ふならば、テキストに對する購買慾をそそり、聽取を希望するやうになる見込みもあるであらう。實質上の表現形式に於ける趣味性も、體裁上の之らの點も共に、必ずしも實行に金が餘計にかかるとは限らない。例へば、この爲に着色印刷が澤山入ると考へるのは、必ずしもあたらない。

頒布　については、

(一) 集中主義――既に述べたやうに、確實な地域に濃厚に行きわたるやうに、集中主義を取る。

(二) 廉價主義による。日本のやり方に一つの特色と思はれるのは、無料頒布であるが、之れは案外效がうすい。現地對象社會の生活程度を考慮して、廉價と感じさせ得るくらゐの値段で、賣るといふやり方が有效である。之に加へるに、

(三) 景品主義ともいふべき策略を以てする。各冊に輕少なものでも、何か景品を添へておく。いはゆる誘引の心理は、馬鹿げたものであるが、利用すべきものがある。各冊に番號を打つておいて、當り番號を買つてゐる者に、之亦輕少でも誘引的景品を送るなど、亦考へに入れてよいかと思ふ。

日本語普及の爲に國家は金を相當に使ふ覺悟はしてゐる。その金が、この方面にも充てられることが望ましい。

六　日本語講座の教案實例（其二）

實例四　お正月の話

この例では聽取者の母國語を以て日本の事情などを話す中に、日本語をそのまゝ採り入れて、その言葉を聽取者の耳に慣れさせ、又實際に口に出して言はせる練習を行ふ。この種の方法は日本語學習を特に志してゐない聽取者に對する場合にでも、又基礎的な日本語學習のあひまに適當に挿んで用ひれば、興味もあり、又語彙を增すことも出來る。

文中、引用符内の言葉は正しい日本語の發音で言ひ、その他は聽取者の母國語で話す。放送時間は約十五分である。

（教師）新年お目出度うございます――新年お目出度うございます――新年お目出度うございます。

今日は今年の最初の放送です。それで新年の挨拶から稽古を始めませう。それは今言つた「新年お目出度うございます」であります。

（教師）新年お目出度うございます――新年、お目出度う、ございます――お目出たうございます――新年――

日本ではお正月が一年中の最も樂しい時で、丁度西洋でクリスマスを祝ふやうに國中で祝ひます。年の始めの三日間は親戚や友人は互に訪問して祝の言葉を述べ、又道で知つた人に合ふと「新年お目出たうございます」と挨拶致します。又遠方の人々とは葉書などで祝意を交換します。この時にも手紙や葉書の最初に書くのは、この「新年お目出たうございます」であります。それで先づ、この挨拶の言葉を覺えることに致しませう。よく聽いて下さい。

（教師）新年お目出たうございます――新年・お目出たう・ございます――新年――お目出たうございます――

新年お目出たうございます。お目出たう――お目出たう――ございます――ございます――お目出たうございます――お目出たうございます。

「お目出たうございます」は皆さんの國語で言へば（譯）のことで、何事によらずお目出たい時に相手を祝つて言ふ言葉です。それですから、結婚の時にも卒業の時にも、何か仕事に成功したやうな場合にでも、この「お目出度うございます」を使つてよろしいのであります。それでは練習を致しませう。

（教師）お目出たうございます――お目出たうございます――ございます――ございます。はい、どうぞ。（生徒）ございます。

（教師）お目出度う――お目出たう――お目出たう。はい、どうぞ。（生徒）お目出たう。

それでは始めから、

（教師）お目出たうございます――お目出たうございます――お目出たうございます。はい、どうぞ。（生徒）お目出たうございます。

次は、

（教師）新年お目出たうございます――新年――新年――しん・ねん――新年。はい、どうぞ。（生徒）新年。

（教師）この「新年」の「新」は（譯）で、「年」は（譯）ですから「新年」は（譯）のことです。

（教師）新年お目出たうございます――新年お目出たうございます――お目出たうございます――お目出たうございます。はい、どうぞ。（生徒）お目出たうございます。

（教師）新年お目出たうございます――新年お目出たうございます。はい、どうぞ。（生徒）新年お目出たうございます。

これでお正月の挨拶を覺えました。今は丁度お正月ですぐにこの挨拶を使ふことが出來ますから、友達などに會つたら日本語で、「新年お目出たうございます」と言つて下さい。

今年は日本の年號で申しますと、昭和十七年です。「昭和」「昭和」日本では　天皇がお代りになる毎に年號も變ります。今の前の天皇の時代は「大正」と申し、その前は有名な　明治天皇の時代で、年號は「明治」と申しました。一昨年は日本の國が建國せられてから二千六百年目で、國を擧げて盛なお祝ひを致しました。それですから、今年は皇紀二千六百二年ですが、　今上陛下が御即位になつた年から數へると、十七年目、即ち「昭和十七年」であります。

新年は「正月」とも言つて、日本では、歐米諸國でクリスマスを祝ふやうに、一年中で一番樂しい時です。

（教師）正月――正月――しやう・がつ――正月。

（生徒）正月。

今年の正月はよい天氣が續き、寒さも例年より嚴しくなくて、大變によい正月でした。

それでは少し日本の「正月」の習慣についてお話をして見ませう。

先づ外に出て見ますと、どこの家にも「門松――門松――門松」が立てゝあります。「門松」といふのは、家の門の兩側に、松の枝を立てたもので、松は常盤木で樹齡も長い木であるのでお目出たいとせられてゐます。「門松」の「門」は（譯）で、「松」は（譯）であります。

（教師）門松――門松――門松――――かど・まつ――門松。
（生徒）門松。

一月一日から七日までを「松の内」、卽ち「門松」の立てゝある間と言つて、親類や友達は互に舊年の交りの御禮や、新年の喜びを言ひ交します。この時の挨拶が前に言つた「新年お目出たうございます」です。

一月一日には、宮中では　天皇陛下が御先祖の神々に禮拜を遊ばす特別な式があり、一般では自分の尊崇する神社に參拜致します。一月一日から三日までは官廳も學校も、銀行會社も全部休みます。

一月四日になると、新年最初の仕事を初めます。政府では　天皇親臨の下に總理大臣以下各大臣が集つて政治初めの式を行ひ、銀行や會社などでも働いてゐる人が集つて、新年の挨拶を交します。

一月五日は新年宴會と言つて、　天皇陛下が臣民有資格者と外國の使臣をお招きになつて、御馳走をして下さいます。

一月七日が過ぎますと、お正月の氣分もそろそろなくなつて、再び普段の樣子になり、「門松」やその他のお正月の飾物などを外し、學校も大抵八日から始ります。

次にお正月によく聞く日本語を中心に色々なお正月の習慣を話して見ませう。

その第一は前に言つた「門松」です。これは前にも說明しましたやうに、家の門の兩側に立てる松の枝のこと

です。又松と一緒に竹を立てることもあります。竹も矢張り常盤木ですからお目出たいのであります。

その次は「鏡餅」です。この言葉は「鏡」（譯）と餅（譯）の二つの言葉から出來てゐます。さうして、この餅が日本で古くから大切にされてゐる丸い形の昔の鏡と同じ形をしてゐます。

（教師）鏡餅――鏡餅。鏡――鏡――（譯）――鏡――か・が・み――鏡。はい、どうぞ。（生徒）鏡。
（教師）餅――餅――も・ち――餅――（譯）――餅。はい、どうぞ。（生徒）餅。

この「鏡餅」といふのは普通直徑一尺位の大きい餅とそれより少し小さい位のとを二つ重ねて、臺のついた盆の上にのせて置きます。そしてその上に、色々お目出たい意味のあるものをのせます。たとへば「橙――橙――橙これはみかんの一種で、冬になると黃色くなり、夏になると靑くなります。日本語の中には、同じ音で違ふ意味のものがありますが、この言葉も、音の「だい」は（譯）といふ事で、「代々」は（譯）で、いつまでも續いて繁盛すると言ふ意味になります。

又「海老」（譯）も入れます。これを漢字で書きますと「海老」で、その「海」は海で、「老」は老人のことで、「海老」は海の老人で、腰がまがつて長いひげを持つてゐるが、長生をすると言ふ意味です。

（教師）海老――海老――え・び――海老。はい、どうぞ。（生徒）海老。

次は「昆布」を「鏡餅」の下に敷きます。昔、この海草は「ひろめ」とも言つて廣い布の意味ともなり、又言葉の音から言ふと「よろこ（ん）ぶ」に通じます。

次はお正月の御馳走を申しませう。第一に「雑煮——雑煮——雑煮」があります。日本人の常食は米ですが、お正月には餅を食べます。この「雑煮」といふのは、汁の中に餅を入れ、その他鳥や色々な野菜を入れて作ります。大變に温いおいしいものです。日本へお出でになつたら是非試して見て下さい。皆さんもきつと好きだと思ひます。

(教師) 雑煮——雑煮——雑煮——ざう・に——雑煮。はい、どうぞ。(生徒) 雑煮。

それから、お正月に友達の家へ挨拶に参りますと、必ず色々な御馳走が出ます。

例へば「お屠蘇——お屠蘇——お屠蘇」これは正月に飲むお酒で、漢字の意味から鬼を殺すとなります。

次はお魚の「鯛」(譯) です。「たい」は、「目出たい」の「たい」に通じるので、お目出たい魚とされてゐます。これは大抵焼いて食べます。

(教師) 鯛——鯛——鯛——た・い——鯛。はい、どうぞ。(生徒) 鯛。

次は「數の子——數の子——數の子」は鰊の子のことです。この「數の子」の「數」は (譯) で「子」は (譯) で澤山の子供といふ意味で、その家の繁榮として日本では大變に喜びます。「數の子」は普通醤油をかけて供します。

次は「大根——大根——大根」(譯) です。これは「大きい根」と書きます。即ち根の大きい野菜で、英國が

しつかりしてゐるといふ意味です。これは前に話した「雑煮」の中や、細く切つて「にんじん」(譯) と一緒にして酢につけて食べます。この「にんじん」は精力をつける野菜とされてゐます。

(教師) 大根——大根——だい・こん——大根。はい、どうぞ。(生徒) 大根。

次のは「にんじん」(譯) です。

(教師) にんじん——にんじん——にん・じん——にんじん。はい、どうぞ。(生徒) にんじん。

それから「豆——豆——豆」(譯) は、日本語の慣用句に「まめにくらす」と言ふのがありますが、この意味から、豆もお正月の御馳走の中に加へます。

(教師) 豆——豆——ま・め——豆。はい、どうぞ。(生徒) 豆。

次は「芋——芋——い・も——芋」(譯) は、根は一つであるが、その一つの根に澤山子供を生むことから「數の子」と同樣に目出たいこととせられてゐます。

(教師) 芋——芋——い・も——芋。はい、どうぞ。(生徒) 芋。

年の暮にはどこの家でもお正月の御馳走を作るのに忙しく、これらの御馳走は、新年になるとどこの家でも用意して置いて、お客が來ると、何時でも御馳走致します。若し日本へお出でになるなら、春の櫻の時も美しいですが、お正月にお出でになると、おいしい御馳走が澤山食べられますよ。

それからお正月は一年中の最も樂しい時で、男も女も老人も子供も色々なことをして遊びます。そのゲームの主なものを擧げると、一は「歌留多——歌留多」です。これはオランダ語のCarteから始つた言葉ださうですが取り札と讀み札とがあつて、取り札を配つて置いて、一人の人が讀み手になり札を讀みます。するとその讀んだ札と同じ取り札を早く取り合ふ遊びです。大人のためには、昔の有名な和歌がカードに書いてあります。又子供のためには、取り札は繪で出來てゐるのもあります。

（教師）歌留多——歌留多——か・る・た——か・る・た——歌留多。はい、どうぞ。（生徒）歌留多。

次は「雙六——雙六——雙六。」これは大きな紙に色々な繪が書いてあつて、その一つ一つに番號があつて、振出しから上りまで順になつてゐます。遊ぶ時には一人一人サイコロを振つて、出た數だけ振出から上りまで進み、一番早く上つた人が勝になるのです。

（教師）雙六——雙六——す・ご・ろ・く——すご・ろく——雙六。はい、どうぞ。（生徒）雙六

次は「羽子つき——羽子つき——羽子つき」。これは羽子板で羽子をつく女の子の遊びです。

（教師）羽子つき——羽子つき——は・ね・つ・き——羽子・つき——羽子つき。はい、どうぞ。（生徒）羽子つき。

次は「獨樂」（譯）と「凧」（譯）これは兩方とも男の子の遊びです。

（教師）獨樂——獨樂——こ・ま——獨樂。はい　どうぞ。（生徒）獨樂。

次は「凧」（譯）。

（教師）凧——凧——た・こ——凧。はい、どうぞ。（生徒）凧。

今日はお正月に關係のある色々な日本語を習ひましたね。それでは初めから言ひますからよく聽いて下さい。

新年お目出たうございます——（譯）——新年お目出たうございます。

正月——（譯）——正月。門松——（譯）——門松。鏡——（譯）——鏡。

餅——（譯）——餅。橙——（譯）——橙。海老——（譯）——海老。

昆布——（譯）——昆布。雜煮——（譯）——雜煮。——鯛——（譯）——鯛。

大根——（譯）——大根。にんじん——（譯）——にんじん。豆——（譯）——豆。

芋——（譯）——芋。歌留多——（譯）——歌留多。雙六——（譯）——雙六。

羽子つき——（譯）——羽子つき。獨樂——（譯）——獨樂。凧——（譯）——凧。

これで今日の放送を終ります。

皆さん、さやうなら。皆さんさやうなら。

實例五　旅　　行

次は對話によつて日本語の會話を敎へる材料である。この例では東京から神戸までの旅行に題材を取り敎師と生徒とが對話をして行く中に、旅行用語を敎へて行かうとするのが目的である。先づ敎師と生徒とが、ホテルの居室で旅行の仕度をしてゐる所から始まり、自動車を呼んで、停車場に着き切符を買つて、汽車に乘り出發するまでで終つてゐる。このやうな放送に於ては、出來るだけ實況を出すことに苦心し、擬音等を十分に用ひれば聽取者の興味を起させると同時に、實際會話の調子にも慣れさせることが出來る。對話の運び方は、主として聽取者の母國語によるが、文中引用符内の言葉は正しい日本語で語り、その練習の方法は前に揭げた語・句・文の練習と同樣な手續で運べばよい。

「皆さん、今日は——皆さん、今日は」(譯)

今日は皆さんと御一緒に旅行に出かけませう。そして、その中に色々な日本語を覺えて行きませう。今日の稽古はAさんと私とで會話をしながら進めて行きますが、Aさんが言葉を練習する時には、皆さんも御一緒に言つて下さい。それでは始めませう。

私共は今東京の帝國ホテルにゐます。東京は世界第二の大きな都會で人口も七百萬人あります。

東京は日本の首府で、ロンドンやニューヨークにも負けない近代都市であります。皇居を中心に約二〇平方哩、電車、省線、地下鐵道、自動車など交通が發達し、その他の近代的設備が備つてゐます。只今私共のゐる「帝國ホテル——帝國——帝國——」(譯)——帝國ホテルは西洋風の旅館でライト式の立派な建物です。多分皆さんも東京へお出になつたら、このホテルにお泊りになるでせう。

今日はこれから神戸へ參りますのでホテルの部屋で仕度をしてゐます。

(敎師)「Aさん、自動車を呼んで下さい——Aさん、自動車を呼んで下さい——Aさん、自動車を呼んで下さい——A・さん——Aさん——Aさん。」

この「Aさん」の「さん」は他の人を呼ぶ時の敬稱ですが、これは男にでも女にでも奧さんにでも誰にでも使はれます。英語で言へば Mr. Mrs. Miss の何れにも當ります。それですから「Aさん」は(譯)のことであります。

(敎師) 自動車を——自動車を——自動車・を——自動車を。呼んで下さい——呼んで・下さい——呼んで下さい——自動車を・呼んで下さい——自動車を呼んで下さい。

「自動車を」の「自動車——自動車——じ・どう・しや——じどう・しや——自動車」は(譯)のことです。「自動車。」

次の「呼んで下さい」は「呼ぶ」（譯）といふ動詞と「下さい」（譯）とが一緒になつたもので、「呼んで下さい」は（譯）といふことになります。それではこの言葉の練習を致しませう。

（教師）呼んで下さい——呼んで・下さい——呼んで下さい。はい、どうぞ。（生徒）呼んで下さい。

（教師）自動車——自動車——じどう・しや——自動車。はい、どうぞ。（生徒）自動車。

（教師）自動車を——自動車を。はい、どうぞ。（生徒）自動車を。

（教師）自動車を呼んで下さい。はい、どうぞ。（生徒）自動車を呼んで下さい。

（教師）今度は私があなたに言ひますから、「はい」と答へて、ホテルの受付に電話をかけて、向ふが出たら「自動車を呼んで下さい」と言つて御覽なさい。それでは始めますよ。

（教師）Aさん、自動車を呼んで下さい。

（生徒）はい。

（生徒）私は電話の受話機を取つて、ホテルの受付を呼び出しました。

（教師）Aさん、どうぞ今習つた日本語で話して下さい。受付が出たら先づ「もしもし、もしもし——も・し・も・し——もしもし」（譯）と言つて、次に「自動車を呼んで下さい」と言へばよろしいのです。

（生徒）もしもし、もしもし。自動車を呼んで下さい。わかりましたか……何ですか。わかりません。（○○）語で言つて下さい。……あゝ、さうですか。東京ステーションまでです。……ありがたう。

（教師）受付で何と言つたのですか。

（生徒）何か「どち……どち……」それから……

（教師）あゝわかりました。「どちらまでですか」でせう。

（生徒）「さうです。「どちら」……」

（教師）どちらまでですか——どちらまでですか——どちら・まで・ですか。

「どちら——どちら——ど・ち・ら——どちら」これは前に習つた「どこ」（譯）と同じやうに使ひます。

「まで——まで——ま・で——まで——どちら・まで——（譯）——どちらまでですか——どちらまで・ですか——どちらまでですか」この最後の「ですか」の「か」は疑問を表はす言葉です。それでは御一緒に。

（教師）どちらまでですか——どちら——どちら——どちらまで——どちらまで——どちらまでですか——どちらまでですか。はい、どうぞ。

（生徒）どちらまでですか。

（教師）答は東京ステーションとおつしやいましたね。ステーションは日本語では「驛」です。「驛——驛——驛」それから東京ステーションは「東京驛」です。「東京驛——東京驛——東京驛」それでは御一緒に。

（教師）驛――驛――え・き――驛。はい、どうぞ。

（生徒）驛。

（教師）「東京――東京――東・京――東京」。はい、どうぞ。

（生徒）東京。

（教師）東京驛――東京驛――東京・驛――東京驛。はい、どうぞ。

（生徒）東京驛。

電話の掛つて來る音

（生徒）もしもし、もしもし。……はい、ありがたう。

受話機を置く音

（教師）何と言ひましたか。

（生徒）「自動車……」とか言ひましたが、多分自動車が來たといふのだと思つて「ありがたう」と答へて置きました。

（教師）「自動車が參りました」でせう。この「參りました――參りました――參りました」は前に習つた「來ます――來ます――來ます」即ち（譯）と同じ意味の言葉ですが「參ります」は丁寧な言ひ方で「參りました」はその過去の形です。それですから受付で言つた「自動車が參りました」は（譯）のことです。

それでは行きませう。

（教師）それから私共は「外套――外套――（譯）――外套」を着て、「帽子――帽子――（譯）――帽子」をかぶつて受付へ下りて行きました。

（生徒）ホテルの出口には、自動車が待つてゐました。自動車の中に入ると先生が運轉手に「東京驛」とおつしやいました。直ぐに自動車が走りました。

自動車の出發する音

（生徒）私共は宮城の前を通りました。恐らく宮城は東京中で最も美しい場所でせう。いいえ、多分世界中で一番美しいと思ひます。水を一杯にたたへた濠にかこまれ、土手の上には何百年も經つた古い松の木が植ゑてあります。東京驛はホテルから餘り遠くありません。約五分程たつと、東京驛の建物が見えて來ました。自動車は東京驛の乘車口に着きました。

この間、自動車の走る音、終りに止つた時の音

（生徒）私共は運轉手にお金を拂つて、鞄をさげて構内へ入つて行きました。

構内の雜音、發車を知らせる聲など

（生徒）入口の所に赤帽が澤山立つてゐましたので、私は荷物を赤帽に預けませうか、と言ひました。

（教師）さうですね。ではあの赤い帽子をかぶつてゐる人に「赤帽――赤帽――赤・帽――赤帽」と言つて呼ん

でごらんなさい。

（生徒）赤帽！　赤帽！

一人の赤帽が私共の方へやつて來ました。そして「どちらですか」（譯）と尋ねました。

（教師）「九時の神戸行急行、二等です——九時の神戸行急行、二等です。」

私は「鞄——鞄——か・ばん——鞄」（譯）を赤帽に渡して、赤帽の胸につけてある「二十五——二十五——二十・五——二・十・五——（譯）——二十五」と言ふ番號をよく見て置きました。

（教師）それから私共は切符賣場の方へ行きました。Aさん、あなたが日本語で買つてごらんなさい。（切符の譯語）は日本語で「切符」です。「切符——切符——きつ・ぷ——きつ・ぷ——切符」。はい、どうぞ。

（生徒）切符。

（教師）さうです。次は物をもらふ時に使ふ「下さい——下さい」をこれにつけて「切符を下さい——切符を下さい——切符を下さい——切符を下さい——切符を下さい——切符を下さい」。はい、どうぞ。

（生徒）切符を下さい。

（教師）さうです。さうすると、切符を賣る人が「どちらですか——どちらですか」（譯）と言ひますからあなたは、「神戸、二等、二枚——神戸、二等、二枚——神戸、二等、二枚」とお言ひなさい。さうすると、

神戸までの二等の切符を二枚くれます。「神戸——神戸——かう・べ——神戸」。はい、どうぞ。

（生徒）神戸。

（教師）二等——二等——に・とう——に・とう——二等。はい、どうぞ。（生徒）二等。

（教師）二枚——二枚——に・まい——に・まい——二枚。はい、どうぞ。（生徒）二枚。

（教師）神戸、二等、二枚——神戸、二等、二枚——神戸、二等、二枚。はい、どうぞ。

（生徒）神戸、二等、二枚。

（教師）神戸は東京から西南約三百哩の所にある大きな貿易港です。歐洲や南洋、濠洲へ行く汽船は皆ここから出ます。東京から急行で約十時間かかります。「二等」の「二」は「一、二、三、」の「二」で（譯）である事は御承知でせう。「等」は物の順位を表はす言葉で二等は（譯）です。「二枚」の「二」も（譯）「枚」は紙など薄いものを數へる時に使ふ言葉ですから「二枚」は直譯すると（譯）です。日本の汽車は一等、二等、三等と三つの等級に分れてゐます。一等の切符は白、二等の切符は青、三等の切符は赤です。二等の料金は三等の倍です。日本の汽車は全國殆んど政府の事業で、アメリカなどの汽車賃と比べると大變に安うございます。それですから皆さんが日本へ來られても旅行は比較的經濟的に出來ます。それではもう一度。

（教師）神戸、二等、二枚——神戸、二等、二枚。（生徒）神戸、二等、二枚。

（教師）おゝ、それから、急行に乘るのですから、急行券も二枚買つて下さい。（念行の譯語）は日本語では「念行」と申します。「念行——念行——きう・かう——きう・かう」——念行。この「念行」は「き・ゆ・う・か・う」の五つの音から出來てゐます。が「きう」と「かう」と前の音も後の音も長く發音して「きゆう・かう」と言ひます。念行——念行。はい、どうぞ。（生徒）念行。

（教師）そして念行の切符は「念行券」と申します。「券——券——券——券」。はい。（生徒）券、

（教師）念行券——念行券——念行券。はい、どうぞ。（生徒）念行券。

（教師）「念行券」の「念行」は（譯）「券」は（譯）ですから、「念行券」は（譯）です。買ふときには初めに「切符を下さい——切符を下さい」と言ふと驛員が、「どちらですか——どちらですか」と尋ねますから「神戸、二等、二枚、急行券も下さい——神戸、二等、二枚、急行券も下さい」と言へばよいのです。この「念行券も下さい」の「も」は、物事を付け加へて言ふ時に使ふ助詞です。「を」を使つて「念行券を下さい」と言へば、（譯）ですが、「も」を「を」の代りに使つて「念行券も下さい」と言へば（譯）と言ふことになります。「本を下さい——本を下さい——」（譯）「帳面も下さい——帳面も下さい——」（譯）「本を下さい、帳面も下さい——」（譯）と言ふのと同じであります。

それでは一回練習して見ませう。

（教師）切符を下さい——切符を下さい。はい、どうぞ。

（生徒）切符を下さい。

（教師）さうすると驛の人が「どちらですか」と、言ひますから、あなたは「神戸、二等、二枚、急行券も下さい——神戸、二等、二枚、急行券も下さい——神戸、二等、二枚、急行券も下さい。はい、どうぞ。

（生徒）神戸、二等、二枚、急行券も下さい。

（教師）それでは、切符を買つてごらんなさい。

（生徒）それでは一つやつて見ませう。先生もどうぞ御一緒に私の側についていちつしやつて下さい。

（教師）よろしうございます。

構内の雜音及二人の歩く靴の音

（教師）私共は出札口へ參りました。さあ、Aさん買つてごらんなさい。初めに「切符を下さい」次は「神戸、二等、二枚、急行券も下さい」ですね。

（生徒）切符を下さい。

切符賣の「どちらですか」と言ふ聲が聞えて來る

（生徒）神戸、二等、二枚、急行券も下さい。

（教師）Aさん、次は前に習つた金高を尋ねる「いくらですか——いくらですか——（譯）——いくら・ですか——いくらですか。」とお言ひなさい

（生徒）はい、いくらですか。

切符賣の「三十一圓六十錢」と言ふ聲が聞えて來る

（教師）「三十一圓六十錢――三十一圓六十錢。」私はAさんに十圓札を四枚渡しました。

（教師）三（譯）、十（譯）、一（譯）、四（譯）、六（譯）、十（譯）、錢（譯）、三十一圓（譯）、六十錢（譯）、三十一圓六十錢（譯）、「三十一圓六十錢。」

（生徒）私がお金を出しますと神戸までの二等の切符と急行券を二枚づつよこしました。私は切符とお釣を受取つて先生に渡しました。先生、汽車は何時に出ますか。

（教師）九時です。「九時――九時――九・時――九時。」九は（譯）、時は（譯）ですから、「九時」は（譯）です。今、八時半ですから未だ三十分あります。待合室へ行つて待ちませう。

（生徒）私共は二等の待合室の方へ行きました。待合室で椅子に掛けて暫く待つてゐると、

「九時、神戸行急行が發車致します」と言ふ發車の知らせが聞えて來る。

（生徒）あれは何ですか、私共の乘る汽車のことでせう。「九時――神戸――急行」はわかりました。

（教師）さうです。もう八時四十五分で、汽車がプラットホームに入るから、プラットホームへ行つてくれと告げてゐるのです。それでは行きませう。

又、靴の雜音、及び二人の靴の音

（生徒）私共は待合室を出て改札口へ參りました。日本の停車場では、プラットホームへ入る所に改札口があつて、切符を切つて貰はなければなりません。

切符を切る音がする

（生徒）あの音は切符を切る音です。

「九時、神戸行急行が發車致します」といふ發車を知らせる聲が聞えて來る。

（生徒）私共はプラットホームに立つてゐます。神戸行の汽車がゆつくりと入つて來ました。

汽車の入つて來る音。「三番線は九時發神戸行急行でございます」といふ擴聲器の聲。又ホームの雜音、汽車の停る音、戸をあける音。

（教師）さあ乘りませう。

靴の音、下駄の音など

（教師）澤山の人が歩いてゐますが、その色々な足音の中で皆さんの耳に慣れない音が聞えて來るでせう。あれは下駄の音です。

下駄の音。

（教師）「下駄――下駄――げ・た――下駄」（譯）です。

初めて日本へ來た外國人の第一印象を聞くと、多くの人はあの下駄の音が珍らしいと申します。日本人

にはあの音が「カラコロ——カラコロ」と聞えます。皆さんにはどう聞えますか。

（生徒）私共は今、神戸行の汽車に乘つてゐます。私の前には先生が座つてゐます。その外、澤山の人が乘つてゐます。

發車のベルの音。「只今神戸行九時の急行が發車致します」と聞えて來る。又「きやうなら」「ごきげんよう」などと言ふ聲も聞えて來る。發車の汽笛、汽車の音など。

（生徒）いよいよ出發です。これから神戸に着くまで約十時間、その間に通る大きな都會や汽車の内でのことを色々先生からお伺ひ致しませう。

（教師）それではきやうなら、又この次の週にお目にかゝります。きやうなら。

この間、汽車が出てから次第に速力を增す音が聞える。

財團法人 日語文化協會事業概要

財團法人日語文化協會は大正二年故阪谷芳郎子爵によつて創設された日本最古の日本語教授機關で爾來三十年間在留外國人に對する日本語教授並に日本語海外進出のために努力して來た。特に最近に於ては大東亞共榮圈確立の國策に順應し、左記部門によつて事業を行つてゐる。

一、日本語教授研究所＝教授法・教材・教具・參考書等の研究編纂、日本語教師養成等の事業
二、出版事業部＝日本語教授に關する研究資料、教科書、參考書、パンフレット等の刊行
三、日語文化學校＝在留外國人に對する日本語教授
四、日本語海外普及事業部＝在外日本語教育機關との連絡

役員

理事及監事

第一銀行頭取 明石照男
貴族院議員 出淵勝次
男爵 園伊能
文部省圖書局長 松尾長造
（常務）
東京帝大教授 松宮彌平
貴族院議員 高柳賢三
貴族院議員 米山梅吉
北支開發株式會社總裁 有吉忠一
津島壽一

主事

日本語教授研究所
所長 松宮彌平
研究主任 石黑魯平
研究員 中丸平一郎
檜田文之
山本彰子
松宮一也

ラジオによる日本語の普及
（一冊六十錢）

昭和十七年四月二十五日印刷
昭和十七年五月一日發行

不許複製

著者 日本語教授研究所編
東京市芝區芝公園九號ノ三
發行人 財團法人 日語文化協會
代表 松宮一也
小石川區戸崎町一三
印刷人 多木壽一
印刷所 多木印刷所

發行所 財團法人 日語文化協會
東京市芝區芝公園九號ノ三
振替東京五八七五八番
電話芝(43)三八六六番

財團法人 日語文化協會刊行物

東京市芝區芝公園九號地三
電話芝(43)三八六六番

日本語教授法	松宮彌平著	著者五十年の實際經驗による教授法概說、文體平易、日本語教授者は勿論、外國語教授者の必讀書。	四六判三一七頁 定價 貳圓 郵稅 十二錢
日本語教授指針 (入門期の教授法)	日本語教授研究所編	日本語教授に於て最も困難とされる初步の指導法を日語文化學校の實地教授に基いて、詳細に說明した教授者の必讀書。	四六判二〇〇頁 定價 貳圓 郵稅 十二錢
日本語讀本 (卷一、卷二)	松宮彌平著	日語文化學校に於ける永年の實地教授に基いて編纂された日本語初步學習用教科書	巽判 各一〇八頁 定價 各壹圓 郵稅 八錢
英文 日本語會話 (卷一、二、三)	松宮彌平著	日語文化學校會話教材により、日本文、ローマ字及英語譯並に語法の說明から成り、獨學用教科書として最適である。國際文化振興會の調査によると現今世界各地の日本語教授機關で最も多く用ひられてゐる教科書は本書である。	菊版 各二〇〇頁 四〇〇頁 定價 卷一、二、參圓 卷三、四圓 郵稅 各十二錢